地域・社会貢献白書

2023

公立大学法人
高崎経済大学
Takasaki City University of Economics

Community Contribution White Paper

地域・社会貢献白書

2023

地域・社会と共に歩む 高崎経済大学

高崎経済大学　学長　水口 剛

経済格差の拡大や少子化、気候変動と異常気象、脱炭素化やAI・デジタル化に伴う産業構造の転換など、社会には課題があふれています。それらのどんな課題にも共通するのは「人」が解決の鍵を握るということです。本学は、充実した教育を通じて有為の人材を送り出し、彼らが社会で活躍することで課題解決に貢献するということを基本に据えています。そこで経済学や地域政策学をしっかり学ぶことはもちろん、ゼミ活動を通じて地域の現場にも足を運び、地域の人と一緒に汗を流す活動もしています。さらに、学生諸君に環境や社会の課題をより身近に考えてもらうために、第一線のオピニオンリーダーを招き、「世界と日本の未来を考える」と題した特別講義も展開しています。

また、個々の教員が研究の成果を通じて地域や社会に貢献することに加え、研究活動の中でさまざまな地域をフィールドとして、具体的に地域の支援もしています。今回の白書では特集としてそのような教員の活動をめぐる対談を掲載しました。

より直接的な地域貢献活動の力になるのが、4,000人いる学生の力です。学生たちは部活動やサークル活動を通じて、さまざまな場面で主体的に地域貢献活動に取り組んでいます。本学の学生が運営する「cafeあすなろ」や、「熱血！高校生販売甲子園」は高崎市内の賑わいにも貢献していることと思います。さらに、学生ボランティア活動支援室では地域からのボランティアの派遣要請に応え、昨年度延べ700人を超える学生をボランティアとして派遣しました。

本学は地域に根ざす大学として地域や社会の皆様と共に歩んでいきたいと願っています。この白書を通じて本学の学生や教職員による多面的な地域や社会への貢献の様子を感じて頂ければ幸いです。

情報発信としての「白書」

公立大学法人 高崎経済大学
理事長　市川 豊行

今年も、「地域・社会貢献白書」の発刊の運びとなりました。これで、5回目になります。2022年は、大人数での飲食を控えるなど、一部制限はあったものの、大学の授業や課外活動も通常どおり行えるようになり、教員・学生のキャンパス内外での活動も活発に行われるようになってきました。

高崎経済大学は、教育研究活動はもちろんのこと、地域・社会貢献活動についても、多方面にわたって行っています。しかし、残念ながら、その実情は市民にはあまり知られていないようです。また、部分的には知られていても、全体像はどうかということになるとまず誰も知らないのではないかと思われます。

それぞれの活動に対する評価は別として、「地域に根を張り世界と交流する知の拠点」を標榜する高崎経済大学として、そもそも地域・社会貢献活動として何をやっているのか、またそれはどういう体系的な考えのもとにやっているのかが明らかにされる必要があります。まさにそれらの活動を取りまとめたのが、この「地域・社会貢献白書」です。

今後、市民を中心とした皆様方と地域を共有し、さらなる地域貢献を目指すとともに、地域・エリアに捉われない社会貢献活動にも一層励んでいく所存です。是非、ご一読いただき、地域・社会貢献活動に対するご示唆をいただければまことに幸甚に存じます。

INDEX

学長・理事長メッセージ …… 1
巻頭企画1：対談　研究による地域貢献　水口剛学長、井手拓郎准教授・山本匡毅教授 …… 3-4
巻頭企画2：地域科学研究所研究プロジェクト
「日本における『持続可能な地域』実現の展望と課題 ―ガバナンスと域内経済循環の観点を中心に―」 …… 5-6
巻頭企画3：特別講義「世界と日本の未来を考える」 …… 7-8
知の拠点化推進室長挨拶 …… 9

研究による社会貢献

地域科学研究所 …… 11-12
地形模型を用いたプロジェクションマッピングで高崎市の実態を可視化　太田慧准教授 …… 13
高崎の＜食＞の魅力を伝えたい(^^♪　加藤健太教授 …… 14

教育による社会貢献

群馬県みどり市との地域資源を活かしたフリーペーパーおよび食・農・観光マップ　片岡美喜ゼミナール …… 17
メイドイン高崎の海外展開プロジェクト　小牧幸代ゼミナール …… 18
ひと・地域を育む実践とゼミ生の学び－生涯学習・社会教育による地域貢献活動－　櫻井常矢ゼミナール …… 19
「高大コラボゼミ」を通じた地域貢献－高崎からのグローカル人材育成－　矢野修一教授 …… 20
ビジネスコンテストとフィールドワークで地域活性化を学ぶ　山本匡毅ゼミナール …… 21

課外活動による社会貢献

学生ボランティア活動支援室 …… 23-24
高崎まちなか教育活動センターあすなろ …… 25
「熱血！高校生販売甲子園」実行委員会 …… 26
T-GRAP（高崎GPSランアートプロジェクト） …… 27
WIN-WINプロジェクト …… 28
ボランティアサークルACT（アクト） …… 29
NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA） …… 30

その他の取り組み …… 31-32
産官学連携活動 …… 33-34
ラジオゼミナール …… 35
高崎経済大学図書館 …… 36

対談
研究による地域貢献

水口 剛　学長
専門分野：
責任投資(ESG 投資)
非財務情報開示

井手 拓郎　先生
観光政策学科　准教授
専門分野：観光学、政策学、観光まちづくり、リーダー発達論、リーダーシップ論

山本 匡毅　先生
地域政策学科　教授
専門分野：経済地理学、機械産業論、中小企業論

はじめに

水口：今日は、研究を通した地域や社会への貢献について、ここ数年の間に本学に着任された地域政策学部のお二人の先生にお話を伺っていきたいと思います。

井手先生、山本先生、よろしくお願いします。始めに、お二人が本学にいらっしゃった時期などを教えてください。

井手：観光政策学科の井手拓郎です。私は、2020年の4月、まさに新型コロナウィルスが流行し始めた年に本学に着任しました。最初の頃は他の先生方にもあまりお目にかかれず、警備の方にもなかなか覚えてもらえない状況でした。今は大学の様子が分かってきましたが、常に新人のつもりでいます。

山本：地域政策学科の山本匡毅です。私は2021年の４月に着任し、３年目に入ったところです。私が着任した時もコロナ禍ではありましたが、授業は基本的に対面に戻ったタイミングで、オンデマンド授業は最初だけでした。

水口：お二人は１年ずつ順番に本学に来られたのですね。コロナ禍の中でいろいろなことが変わったタイミングでの着任ということで、私たちも大変でしたが、新しく大学に来られた方は特に大変だったでしょうね。

研究・専門分野

水口：お二人の研究されている分野や内容について伺いたいのですが、井手先生は観光政策の中でも、特にまちづくりがご専門になるのですか。

井手：はい、専門は「観光まちづくり」で、観光客の集客はもちろん、地域振興の全体がテーマになります。

まちには色々な方が暮らしているので、その暮らしをより良くしていく、それと観光客集客をどのように両立していくのか。そういったところに関心があります。

「観光まちづくり」といっても、色々なテーマがありまして、その中でも私は人材、特にリーダーに注目しています。本学に来る前の５年間ぐらいはリーダーに関する研究をしていました。

水口：なるほど、観光まちづくりというのは、ただ観光客を集めるためのまちづくりではなくて、そこに住んでいる人たちの生活も含めたまちづくりということなのですね。

次に山本先生ですが、ご研究の中心は航空産業とうかがっていますが、本学の脱炭素ワーキンググループにも出ていただいていますよね。

山本：サプライチェーンの脱炭素に関心がありました。ワーキンググループへの参加は、昨年環境省の地域中核人材育成という補助事業を利用したのがきっかけでした。本学での担当科目は中小企業論でして、中小企業もやはり取引関係の中で脱炭素・グリーン調達ができないと取引できないということがありまして、その中で脱炭素に興味を持ってきました。

水口：中核人材という点では、井手先生の“リーダーシップ”につながる部分がありそうですね。

山本：そうですね。環境省の事業は、脱炭素について若い学生たちに理解を深めてもらい、フィールドに出て、実際に脱炭素に関わるビジネスの現場で学んでもらいたいという趣旨だったようです。

一方、私のメインは航空宇宙産業です。産業論という視点から中小企業を見るというのが私の一つの見方です。個々の産業の広がりの中で、中小企業がどのような取引関係を作っているか、その取引関係の中でどのような集積を作っているかを見ています。実際に中小企業を訪問する機会も多いですし、お話しする中で単にヒアリングをするだけでなく、こちらが持っている情報も伝えながら話を聞くという形です。ヒアリングさせていただいた企業からの相談に応じて、他県の企業をめぐるツアーを組んだり、提案をしたりということもしています。

水口：お二人とも実践的に地域や企業と関わっているのですね。

地域の問題解決へ

水口：地域政策学部はまさに、地域の課題解決を目的として、地域づくり・まちづくりの支援が必要だということで、27年前にできたわけですが、実際には地域の課題は多種多様で、難しいことだと思います。その点、お二人とも実践型の研究スタイルだと思いますし、「俺に任せろ」という感じなのでしょうか？

井手：私のスタイルの例をお話しします。
群馬県の下仁田町観光協会が、観光庁が推進する観光地域づくり法人（DMO）に登録されていて、その支援をしています。
具体的には、DMO事業推進検討会議の座長の役割を担っています。毎月の会議で、町の議員さんや町役場の方、観光協会の皆さんと、協会のあり方から事業評価の仕組みづくり、一つ一つの取り組みの検討まで、多岐にわたる議論をしています。

水口：この事業を通じてこんなことを達成しようというゴールのようなものは設定されているのですか？

井手：私の中に、下仁田町観光協会のDMO事業に関するゴールがあるわけではありません。私としては私自身が最初からゴールを見定めている必要はないと思っています。それというのも、ゴールは地域の皆さんが自分たちで描くものだと思っているので、できる限り「みなさんはどうしたいですか？」と意見を引き出すようにしています。

委員会への参加など支援の仕方は色々あると思いますが、自分自身はファシリテーターという立場でいようと思っています。

いずれ私が行けなくなったときにどうするのか。やはりそこは、地域の方々がご自身で考え、行動していく必要がありますので、そこを支援するというスタンスでいます。

水口：井手先生がいなくなっても彼らが自発的に動けるように、いわば人を育てるということですね。まさに最初におっしゃっていた人づくり、リーダーシップの育成ということかと思います。

DMOという仕組みができてもそれを動かす人材がいなければ機能しない。ところが、そういった人材はなかなかいない。だから、その人材を育てるところからされているわけですね。

井手：回り道してもらいながら、仕組みをどうするかとか、観光の商品開発はどうするかなど、自分たちで考え、動いて頂けるように支援しているつもりです。私からアイディアや答えのようなものを言うのは、できるだけ抑制するのが大事かなと思っています。

水口：その地域の人自身が動かないと続いていかないですものね。まるで「大人のゼミ」ですね。今、どこでも人材育成という言葉を聞くのですが、どうやったら人材を育成できるかのノウハウはあまりないと思います。山本先生が関わる中小企業の場合でも、やはり、先生がいなくても企業が動けないといけないという意味では同じになりますか？

山本：経営者が最終的に判断をしなければいけないので、私が意思決定をするのではなく、判断する材料を提供するのが私の仕事だと思っています。

水口：地元の中小企業も一緒になってのまちづくりですし、地域が衰退していく理由の1つは、そこに仕事がないからですよね。仕事がないから人が集まらず、人が減るから衰退していく。ただそうはいっても、簡単に仕事ができれば、苦労はしないわけで、その地域の中小企業が生き残っていくための何かヒントはありますか。

山本：基本的にはグローバル展開か、今までの取引先とは別の取引先を広げていくという、2択だと思います。グローバル化といっても、ものすごく敷居が高いところを目指すのではなくて、できるところから始めることになります。例えば、海外の商談会に行ってみることですね。国内の取引関係の拡大は販路開拓になるので、商談会などに積極的に経営者が出かけて商談するというようなことです。

実は、中小企業は従来の取引先だけで利益を上げられていたので、あまりそのようなことをしてきませんでした。新しいことをしなくても、とりあえず現状の維持ができました。ただ、リーマンショックや産業構造の転換の中で経営が厳しくなってきたこともあり、仕事の環境変化の中で、やはり新しい仕事を取りにいかなくてはいけない。従来とは違うことをしなくてはいけないということで、新たな販路開拓をしたりしています。

水口：なまじ日本は系列の中に組み込まれていたから、そこに安住できていたけれど、今はもう、そうはいかないということですね。展示会などに行くのは当たり前だと思っていましたけど、そうでもないのですね。

山本：展示会に来ている企業は、すごく意識の高い企業です。井手先生がご専門の観光分野でも、意識が高い自治体はだいたい来ていて、意識が高くなくて問題のある自治体や企業ほど、展示会へ来ていないのではないかと思っております。

水口：なるほど。そこに気づきを与えてあげれば、彼らは動くと。ただ、国内の販路開拓はそういうことでしょうけど、やっぱり海外に進出しようとすると、視野を広げると言っても商慣行の違いもありますし、グローバル人材の有無という点でも難しいのではないでしょうか。

山本：商慣行自体はもちろん違うので、それは勉強しなくてはいけないのですが、市や県の産業支援などでもグローバル支援をするようになってきているので、むしろ社内体制をちゃんと構築して臨むかどうかですね。例えば、英語でちゃんとマネジメントできる人を育成する、あるいは外から連れてくるといったことです。

水口：いつも通訳を連れて行く訳にはいかないですものね。

山本：そうです。通訳を毎回連れていくわけにはいかないのです。昨年、関係させていただいた従業員３０人規模の食品会社様で「やる気があればできる」を実践した例もありました。やはり経営者の方にその気持ちを持っていただくことが大事です。

今は企業が行政とか団体に行けば、すごく丁寧に対応してくれます。でも、その窓口があるということを企業が知らないのです。

水口：情報がいきわたっているように思いがちですけど、まだまだ知られていないことがいっぱいあるし、そういう手助けをするだけでも随分違うのですね。

お二人がとても地域や社会に貢献され、地域社会を盛り上げていると感じました。その延長線上に大学としても先生方の研究を通じて地域や社会に貢献していく。そんな姿を描くことができそうですね。

お二人の一層の活躍を期待しています。これからも頑張ってください。

地域科学研究所研究プロジェクト

日本における『持続可能な地域』実現の展望と課題
― ガバナンスと域内経済循環の観点を中心に ―

私の主宰する高崎経済大学地域科学研究所の研究プロジェクト「日本における『持続可能な地域』実現の展望と課題―ガバナンスと域内経済循環の観点を中心に―」（通称 SuCoP: Sustainable Community Project）では、地理学、地方財政、地域経済、地域通貨、協同組織金融、連帯経済、社会的企業、都市政策などを専門とする学内外 11 名のメンバーが集い、研究を進めています。2023 年度でプロジェクト 3 年目を迎え、研究最終年となります。

（1）2022 年 7 月 2 日（土）オンライン研究会（講師：本山美彦氏）

まずは、京都大学名誉教授／公益社団法人国際経済労働研究所所長の本山美彦氏を講師としてお招きし、「ロシアによるウクライナ侵攻から学ぶべき課題―農業自給率を高める」と題する報告を行っていただきました。

報告の骨子は、賀川豊彦による協同組合運動を「コモン」の観点から深掘りし、現代的意義を探るというものであり、Zoom によるオンライン研究会でしたが、森林資源の活用、大都市に残る共有地の有効利用などをめぐって、講師とメンバー間で活発な議論が行われました。

（2）2022 年 7 月 30 日（土）オンライン研究会（講師：杉山睦郎氏）

次に、元・FS グリーンネット社長／元・埼玉県障害者雇用総合サポートセンター企業支援アドバイザーの杉山睦郎氏を講師としてお招きし、「障害者雇用の現状と課題」と題する報告を行っていただきました。

杉山氏の報告では、日本の雇用統計の確認から始まり、法律や支援制度の概要、埼玉モデルの意義を具体的に説明していただいたうえ、企業、支援機関、障害者自身、法制度それぞれの課題を挙げていただきました。

基調報告後、参加メンバーが活発に議論を行いましたが、このオンライン研究会には、障害者のグループホームを立ち上げる予定の本学卒業生も静岡県浜松市から参加し、具体的な課題について、意見が交わされました。

（3）2022 年 11 月 22 日（火）対面式公開講演会（講師：加藤勝一氏）

新型コロナ禍が収まらないなか、SuCoP 研究会は、2022 年度もオンライン開催を余儀なくされましたが、晩秋に差しかかり、感染状況が多少落ち着きを見せ始めた頃から、対面式の公開講演会の実施に踏み切りました。

11 月 22 日には、福島県から（株）元気アップつちゆ顧問の加藤勝一氏を講師としてお招きし、「東日本大震災と原発事故からの復興再生まちづくり―土湯温泉の元気アップ」と題する公開講演会を行いました。

2011 年 3 月の東日本大震災、福島第一原発爆発に伴う甚大な被害から、福島の山あいにある温泉街はどのように復興を遂げたのか。観光交流センターやまちおこしセンター、新公衆浴場の整備、地熱発電事業、エビ養殖など、様々なプロジェクトを先頭に立って展開してきた加藤氏から、並大抵ではない復興再生の軌跡を語っていただきました。

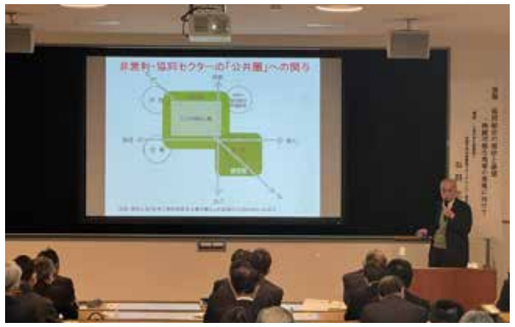
当日は、本学理事長、教員、学生のほか、ぐんまみらい信用組合役員、高崎経済大学附属高校教員・生徒、上毛新聞論説委員などにも参加いただき、質疑応答まで有意義な講演会となりました。

（4）2022 年 12 月 6 日（火）対面式公開講演会（講師：石田正昭氏）

12 月には、三重大学名誉教授／京都大学学術情報メディアセンター研究員の石田正昭氏を講師としてお招きし、「協同組合の現状と展望―持続可能な地域の実現に向けて」と題する公開講演会を行いました。

貧困や格差の拡大、気候変動の深刻化、パンデミックの周期的到来、さらには核戦争の脅威など、様々なリスクが人類の生存を脅かしかねない状況下、協同組合はどのような役割を果たせるのか。いのち・地域を未来につなぐため、協同組合には何ができるのか。長年にわたり、研究・教育・実践を通じ、協同組合を支えてこられた石田氏から、群馬県の事例も交えつつ、協同組合の可能性と課題について語っていただきました。

この講演会でも、本学理事長・学長、教員、学生のほか、JA 群馬中央会役員、群馬県生協連役員、ぐんまみらい信用組合役員、高崎経済大学附属高校教員・生徒、JA 全中職員、県内マスコミ関係者など、一般市民を含め幅広い参加者を得て、質疑応答まで有意義なものとなりました。



講演の様子：講師 石田 正昭氏

（5）2023 年 3 月 9 日（木）対面式公開講演会（講師：戸所隆氏）

年が明け、3 月には、立命館大学と高崎経済大学で長く研究・教育に携わってこられた高崎経済大学名誉教授の戸所隆氏をお招きし、「持続的発展をめざして 50 年間取り組んだアーバンデザイン―滋賀県草津市を中心に―」と題する公開講演会を行いました。

持続可能な地域社会づくりに向けて、「地域の成立要件」（安心・安全、基礎教育、雇用の確保、住民自治・参加）、「都市の本質」（接近性、結節性、創造性、中心・周辺構造、地域の個性、新陳代謝性）といった「都市地理学」の基礎理論の理解をもとに、変革期において開発哲学を再構築すべきとの議論が説得的に展開されました。

講師の戸所氏には、本学教員、学生のほか、ぐんまみらい信用組合幹部職員、一般市民、高崎経済大学附属高校生徒などを前に、ご自身が半世紀以上にわたり取り組んでこられた滋賀県草津市のアーバンデザインについて、ときに群馬県前橋市、高崎市にも言及しながら、分かりやすく説明いただきました。

（6）2023 年 3 月 18 日（土）対面式公開講演会（講師：西野寿章氏）

そして 2022 年度最後の公開講演会が「地域をみつめて 35 年―語り継ぐべき人々の生業と歴史―」と題し、SuCoP の理論的・精神的支柱である西野寿章教授の高崎経済大学退職記念講演会として行われました。

1988 年 4 月から 35 年間の在職中、西野氏は「経済地理学」という狭義の専門にとどまらず、日本における町村営電気事業史、再生可能エネルギーや公共交通・都市インフラをめぐる歴史・政策に関する研究を積み重ねるとともに、群馬県産材住宅補助金制度、森林環境税など先駆的政策のアドバイザー／プラクショナーとしても活躍してこられました。

講演会では、農山村開発や内発的地域電化に関する長年の研究について、豊富な資料、写真に言及しながら語られました。そして、共有林、水利、堤防、地域電化事業などを通じて育まれる「共通の関心」こそがコミュニティの存立基盤であることが明らかにされました。

講演の様子：講師 西野 寿章氏

本講演会には、本学理事長、副学長、教職員、学生のほか、明治大学・日本大学・名古屋大学など他大学の教員、西野ゼミ卒業生、ぐんまみらい信用組合幹部職員、高崎経済大学附属高校教員、一般市民など、群馬県にとどまらず、全国各地から約 120 名の方々に参加いただきました。

人口減少と東京一極集中に歯止めがかからず、日本における「持続可能な地域」の実現には大きな課題がいくつも存在します。即席の解決策などありませんが、何もなければ出会わなかったはずの多様な主体が一堂に会して議論を積み重ね、アイデアを出し合うことは非常に重要です。こうした意味で、公開の講演会や研究会が実施される地域科学研究所のプロジェクトは、高崎経済大学による地域・社会貢献の一環として位置づけられるべきものです。本プロジェクトでは、来年度中の成果報告書公刊に向け、2023 年度も公開講演会や研究会を開催します。

（地域科学研究所所員 / 経済学部教授　矢野　修一）

特別講義「世界と日本の未来を考える」

学生自身が課題解決を体感する授業

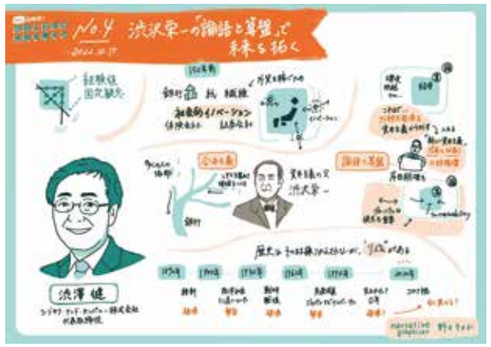
いつも私たちの予想を超えて展開する「未来」。そんな「未来」を起点として今やるべきことを考える、バックキャスティングと呼ばれる思考方法のスキルや、今般のコロナ禍など先の見えない「正解のない時代」を生き抜くためのリテラシー（知識・能力）は、教室の座席に座って、ただ講師の話を聴いている受動的な授業では身に付けることができません。

この授業は、地球規模の課題や技術革新の分野において第一線で活躍している方々の「講義」と、その「講義」をヒントに学生がチームを結成して新規事業案を企画する「グループワーク」を組み合わせたプロジェクト型学修プログラムとすることにより、学生がこれらのスキルとリテラシーを獲得すること、社会課題の解決に向けて自ら考え、行動できる人材へと成長することを目指しています。

第一線で活躍する方々を講師に迎えて

この授業は、持続可能でより良い社会の実現を目指すための世界共通の目標であるSDGs（Sustainable Development Goals）をテーマとして全15コマの内容を設定し、地球上の「誰一人取り残さない」社会の実現のために私たちは何をしたらよいのか、地球規模の課題を学生自身が自分ごととして考え、答えを導き出すことも目的としています。

SDGsの17の目標における各分野の第一線で活躍する方々を講師に迎え、SDGsの達成状況だけではなく、国際社会や各地域が抱える課題と企業の取組などの知識を学ぶことができるような内容としており、学生は社会の現実をきちんと理解し、その社会が自身の人生に影響することも自覚します。熱い想いを持った講師の方々の講義は、毎回密度が濃く、学生が回答する「授業に関する学生アンケート」の結果も学部・大学全体の評価を大きく上回り、学生たちにとって魅力的な授業となりました。



第４回講義の一部（グラフィックレコーディング）

この授業でしかできない経験

授業の後半では、学生は4～7人のチームに分かれ、前半の「講義」を中心に得られた知識や理解を基に、企業の立場で社会課題の解決のための新規事業案を考えました。

学部や学年が異なる学生同士のグループワークは、最初は遠慮が見られたものの、次第に積極的に自分の意見を伝えられるようになり、意見をぶつけ合いながら新規事業のアイデアを高めていきました。ときには意見が合わずに企画が白紙に戻ることもありましたが、他の授業ではなかなかできない経験が、コミュニケーション能力の向上につながりました。

各チームで企画した新規事業案は、チームごとにスケッチブックリレーによるプレゼン動画にまとめ、「企業の強みを活かしているか」「2030年の社会課題か」の2点を評価の視点として、講義に協力いただいた企業だけではなく、学生同士で相互評価を行い、表彰を行いました。

受賞した新規事業案（グラフィックレコーディング）

	講師名	テーマ
1	井澤　友郭（NGOこども国連環境会議推進協会事務局長）	イントロダクション
2		スキル演習（カードゲーム）
3	国谷　裕子（東京藝術大学理事、慶應義塾大学大学院特任教授）	2030年に向けて、私たちにできること～SDGsで未来を考えよう～
4	渋澤　健（シブサワ・アンド・カンパニー㈱代表取締役）	渋沢栄一の「論語と算盤」で未来を拓く
5	大崎　麻子（NPO法人Gender Action Platform理事）	なぜ、世界はジェンダー平等を目指すのか～SDGsから考える国際潮流と日本の課題～
6	湯浅　誠（認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長）	コロナと居場所 こども食堂の取り組みから
7	平田　仁子（一般社団法人Climate Integrate代表理事）	気候危機と市民社会・学生の役割
8	井澤　友郭	私たちが望む未来をレゴブロックを活用して描く
9	宮井　真千子（森永製菓㈱取締役常務執行役員）	食の力で世界を変える
10	飯塚　優子（住友林業㈱執行役員、サステナビリティ推進室長）	森林の力で世界を変える
11	野口　圭（日本電気㈱デジタルビジネスプラットフォームユニットIMC統括部マーケティングディレクター）	デジタルの力で世界を変える
12	井澤　友郭	課題解決に向けたリソース＝企業の決定
13	井澤　友郭	新規事業の開発～課題の深堀とリソース活用～
14	須藤　あまね（聖心女子大学現代教養学部学生）	プレゼンシナリオの制作
15	井澤　友郭	全体リフレクション

2022(令和4)年度　全15コマの講師・テーマ

番外編として

令和4年度は特別講義の番外編として、本学の同窓生であり、ヤマトホールディングス株式会社の代表取締役社長/社長執行役員である長尾裕氏を講師に迎え、「ヤマトグループのサステナブル経営」をテーマに、社員約21万人の大企業が積極的に取り組んでいるサステナブル経営について、詳しい説明を聴く機会を設けました。

ビジネスの第一線で活躍する同窓生を目の前に、社会で実際に起きているできごとや課題について直接聴く授業は、学生にとって非常に刺激的で、「『未来より先に動け』という言葉が印象的でした。とても強い意志を持った決断であると感じたからです。」「前向きな行動からの失敗は良い経験になるというお話が印象に残った。この考え方を心に留めて様々なことに挑戦していきたいと感じた。」など、受講した学生の感想からは、自ら考え、行動する力を身に付ける後押しを受けた授業となったことがわかりました。

長尾氏と学長の対談の様子

おわりに

受講した学生からは、「自分を高めていきたいと考えている人たちには、特に勧めたい授業」「やる気のある人が多いので、自分のやる気を上げてほしいという人、一緒に頑張る仲間が欲しいという人にもお勧め」「友達づくりにもお勧めの授業」「2年生から始まるゼミの練習にもなる授業だと思う」など、授業を高く評価する声が多数寄せられました。

3年目を迎える今年度も、何事も他人任せにはせず、主体的に自身ができることに取り組む学生が1人でも増えるよう、この講義を開講します。

※令和４年度の講義の情報はこちらからご覧いただけます。
高崎経済大学ホームページ　特別講義「世界と日本の未来を考える」
https://www.tcue.ac.jp/leafpage/1436.html

多角的な地域・社会貢献への取組:研究・教育・課外活動

知の拠点化推進室長　唐澤達之

本学では、地域における知の拠点としての機能を発揮するため、知の拠点化推進室を設置しています。知の拠点化推進室は、地域連携を進める取組の主なものとして地域科学研究所の事業と高大連携事業とを統括していますが、本学の地域・社会貢献活動は、部局の枠組みを超えて、また教育・研究活動から学生の課外活動に至るまで様々なレベルで取り組まれています。本白書は、これらの活動に関する情報を集約し見える化を図ることで、その全体像について情報発信することを目的としています。

本学の地域・社会貢献活動は、貢献の主体を軸にすると「教員による貢献活動」と「学生による貢献活動」とに分けることができますが、その内容を軸とすると「研究による社会貢献」、「教育による社会貢献」、「課外活動による社会貢献」の3つに分けることができます。この内容を軸とした分類にしたがって、本白書の目次は構成されています。

本学は、学則にもあるように、教育・研究を通じて地域の向上発展に貢献することをミッションとしており、地域・社会貢献に資する研究を進め学術的にも高い評価を受けている多くの研究者を擁しています。そこで、今回の白書では、地域・社会貢献に資する学術研究について、特集で取り上げました。また、これらの研究は、社会の持続可能性に関わるテーマを取り扱っていますが、こうした課題を自分ごととして考え、自ら答えを導き出すことのできる人材の育成は、教育機関としての本学のミッションであり、こうした観点からの特色のある取組として、特別講義「世界と日本の未来を考える」を特集で取り上げました。

研究による社会貢献

まず、長年にわたり地域連携に取り組んできた地域科学研究所の取組として、プロジェクト研究、公開講座・連携公開講座、地域めぐり、地元学講座、市民ゼミなど、市民への知の還元の取組について紹介しました。また、本白書では、高崎市の実態を可視化する地形模型を用いたプロジェクションマッピングに関する研究と、食を通じた地域振興に関する研究を取り上げました。

教育による社会貢献

地域連携の組織的な取組として、高崎経済大学付属高等学校を始めとする地域の高等学校との高大連携事業について紹介しています。高崎経済大学付属高等学校との連携は、「高崎市と世界をつなぎ、地域に貢献できる人材の育成」を目指す『TSUBASAプロジェクト』を通じて強化されています。

本学では、地域政策学部を中心に地域課題を研究テーマとして取り組むゼミナールが多いことが特色ですが、本白書では、これらの取組の一部を取り上げました。これらの活動には、地域の観光振興、海外市場向けの新商品開発、生涯学習・社会教育による地域貢献、ビジネスプランの提案等、様々な実践的な活動が含まれます。

課外活動による社会貢献

本学では2018年、学生ボランティア活動支援室を設置し、学外からのボランティア要請と学生をマッチングするだけでなく、本学の学生が提案したボランティア企画の実現にむけて支援するなど、様々な取組をしています。2022年度からは、支援室に学生協働スタッフを設置し、教職員と学生が一体となって啓発活動に取り組んでいます。

本学には、課外活動においても、地域・社会貢献を目的とした学生団体がたくさんあります。本白書では、それらのなかから、高崎市の歴史的なコミュニティカフェの運営に取り組む「あすなろ」、高校生が独自に企画した商品を高崎中心市街地で販売し競い合う大会の運営に取り組む「熱血！高校生販売甲子園」実行委員会、ボランティア活動に取り組む学生団体（T-GRAP、WIN-WINプロジェクト、ACT、IVUSA）を紹介しています。

本白書で紹介した地域・社会貢献活動のいずれにおいても、地域社会のみなさま方からは、貴重な研究のフィールドや課題発見のチャンスを、また貢献活動を通じた学生の成長の場を提供いただいていることに改めて感謝を申し上げる次第です。これらの取組がどれほどの成果をあげているのかは、市民のみなさまの評価を待たねばならないところですが、「地域・社会貢献と研究・教育の発展の間に好循環を生み出す」ことが、地域・社会貢献活動の大きな成果であり、またそのような好循環こそが活動の持続性を担保するのだと思います。今後も少しでも地域社会の役に立てるよう努めてまいります。

地域・社会貢献活動を通じた本学と地域・社会の関係

2023

地域・社会貢献白書

研究による社会貢献

Takasaki City University of Economics

2022年度　地域科学研究所活動報告

地域政策学部教授
地域科学研究所所長
佐藤　徹

2021年度に続き、2022年度も新型コロナウイルス感染症が拡大した。国内では、7月から9月の「第7波」、10月からの「第8波」と断続的に続いた。そうした中、公開講座と公開講演会の一部を対面又はオンラインのいずれかで受講できるハイフレックス方式で実施した。また、地域めぐりの実施にあたっては、地元企業の方々に視察のご協力を頂いた。さらに、研究プロジェクトについてもオンライン形式と対面形式を併用して遂行された。

コロナ禍でさまざまな事業の開催が難しかったが、これまでの経験を活かして、ほぼ計画どおり事業を実施することができた。

公開講演会

第17回、観光地域プランナーである上村基氏による「コロナ禍における持続可能な観光地域づくり」（2022年10月14日（金）高崎経済大学図書館ホール）

第18回、インプロアカデミー 代表で群馬大学非常勤講師である内海隆雄氏とa/r/t/s Lab（アーツラボ）の皆さんによる「インプロ（即興演劇） から学ぶ 表現とコミュニケーション」（2023年3月4日（土）高崎経済大学図書館ホール）

連携公開講座

高崎市中央公民館を会場に高崎経済大学連携公開講座を開催しました。

5月14日（土）　経済学部教授　高松 正毅 所長
「日本語の面白さ」
5月21日（土）　経済学部准教授　澤田 悠紀 所員
「農と地域ブランド －知的財産法の観点から－」
5月28日（土）　地域政策学部准教授　鈴木 耕太郎 所員
「疫病退散を願う祭りと信仰　－祇園祭と牛頭天王について－」
6月11日（土）　地域政策学部准教授　太田 慧 所員
「地図の特徴と見方を学ぶ」
6月18日（土）　経済学部教授　矢野 修一 所員
「高崎からのグローカル人材育成　－高大コラボゼミの12年－」

公開講座

第39回「現代社会への多面的アプローチ」（全10回）
10月19日（水）　地域政策学部教授　山本 匡毅 所員
「変化する日本の航空宇宙産業」
10月26日（水）　経済学部准教授　黒崎 龍悟 所員
「アフリカにおける家庭用太陽光発電の可能性と課題」
11月1日（火）　経済学部教授　秋元 礼恵 所員
「スウェーデン社会のこれまで、今 そして これから」
11月10日（木）　地域政策学部教授　八木橋 慶一 所員
「新しい協同組合の成立とその意義 －労働者協同組合について－」
11月17日（木）　経済学部教授　唐澤 達之 所員
「中近世ヨーロッパのギルド －人々の絆のかたち－」
11月21日（月）　経済学部教授　谷口 聡 所員
「民法における成年年齢18歳への引下げ」
11月25日（金）　地域政策学部教授　増田 正 所員
「日本の選挙を考える」
12月1日（木）　地域政策学部教授　福間 聡 所員
「倫理学における非理想理論について」
12月9日（金）　地域政策学部准教授　米本 清 所員
「地方都市の人口と経済 －コロナ禍を踏まえて－」
12月16日（金）　地域政策学部教授　西野 寿章 所員
「地方の都市と山村を考える －中心市街地自治会と山間集落の限界化－」

あすなろ市民ゼミ

cafeあすなろにて開講する本学教員による少人数のゼミナールです。

9月8日（木）　地域政策学部教授　岩崎 忠 所員
「空き家・空き店舗をいかに再生するか」
9月15日（木）　地域政策学部准教授　安田 慎 所員
「観光を通じて、私たちはいかに地域社会を形作ってきたのか？」
9月27日（火）　地域政策学部准教授　若林 隆久 所員
「より良いコミュニケーションや関係性とは？」
10月5日（水）　経済学部教授　加藤 健太 所員
「日本の工業化と渋沢栄一の役割」

地元学講座

第13回、ＮＰＯ法人時をつむぐ会の代表理事 続木美和子氏による「ケルナー広場を中心とした子育て支援について」（2022年11月16日（水）13時30分～15時30分 高崎経済大学図書館ホール）

第14回、日本ピアノホールディング株式会社代表取締役社長 中森隆利氏による「音楽のある街 高崎―音楽・文化によるまちづくり―」（2023年1月17日（火）13時30分～15時30分　高崎経済大学図書館ホール）

地域めぐり

第12回、「知っておきたい烏川流域の歴史と役割」（2022年10月1日（土）8時50分～17時00分
コーディネーター：西野寿章所員（地域政策学部教授）
小栗上野介ゆかりの東善寺、くらぶち草の会、清水の梅をめぐり、烏川上流域の歴史と役割を学んだ。

第13回、「高崎市のものづくり企業をめぐる」（2022年11月29日（火）9時30分～16時40分
コーディネーター：高松正毅所長（経済学部教授）
オリヒロ株式会社、株式会社市川食品、株式会社山岸製作所を訪問し、その発展の歴史と現在、未来について学んだ。

高崎経済大学ブックレット

⑧『高崎の紅板締め染－戦前高崎の染色業－』
紅板締め染めは、京都と高崎だけに存在した特殊な染め工法である。1889（明治22）年から1932（昭和7）年までの43年間に渡る高崎の染色業の歴史をひもとく。
⑨『〈食〉で高崎のまちを元気にする－地域振興とブランドづくりへの挑戦－』
高崎の〈食〉に関わるイベント「キングオブパスタ」と「高崎バル」、加えて「絶メシリスト」に載った料理を対象に〈食〉を通じた地域振興の取り組みに接近する。執筆者である地域科学研究所・加藤健太所員（経済学部教授・経営史）が「第14回キングオブパスタ2022」に参戦した様子も紹介する。

地形模型を用いたプロジェクションマッピングで高崎市の実態を可視化

地域政策学部
准教授
太田　慧

2018年の学習指導要領の改訂により、2022年から高等学校における「地理総合」が必修化された。こうした地理教育における地図や地理情報システム（GIS）へのニーズが高まるなかで、近年地図の表現手法として地形模型にさまざまな地図を投影するプロジェクションマッピングが有用である。太田ゼミでは、2022年7月に実施された高崎経済大学のオープンキャンパスにおいて、2021年度と2022年度のゼミ生とともに製作した高崎市周辺の地形模型とプロジェクションマッピングを実践した。

地図を投影するための地形模型は、地形図を貼り付けたスチレンボードを等高線に沿ってデザインナイフとヒートカッターで切り分け、切り分けたパーツを組立てて製作した（写真1，2）。こうした作業には地形図の判読が必要となる

写真１　地形模型製作中の様子

写真２　完成した地形模型

ため、地形模型の製作を通して地形図の読み方に慣れるという効果も期待できる。次に、GISを用いて地形模型に投影する地形や地質といった自然環境のレイヤーと、人口や鉄道路線図、学校の分布などの社会環境のレイヤーを作成した。

オープンキャンパスには主に高校生とその保護者が来場し、ゼミ生によるプロジェクションマッピングの解説、PCを使ったGISのレイヤーの操作体験、地形模型の製作過程をまとめたポスター展示を自由に見学できるようにした。ゼミ生によるプロジェクションマッピングの解説では、あらかじめ準備しておいたプロジェクションマッピングの解説用のシナリオにもとづいてゼミ生がレイヤーを操作しながら投影した地図の特徴を参加者に解説した。まず、地形模型の範囲の概要を説明し、市町村合併による高崎市の市域の変遷を時系列に沿って説明した（写真3-a）。続いて、標高や山頂、地形区分、表層地質図、土壌分類のレイヤーを切り替え、火山である榛名山と高崎市街地のある平地の自然環境の違いを示した。次に、河川の分布と浸水想定区域、土砂災害警戒区域、高崎市を東西に走る深谷断層を示し、想定される自然災害を可視化した（写真3-b，3-c）。その後は土地利用、人口のメッシュを表示し、その上に鉄道路線のレイヤーを重ねることで高崎市の社会環境の特徴を説明した。最後に高崎

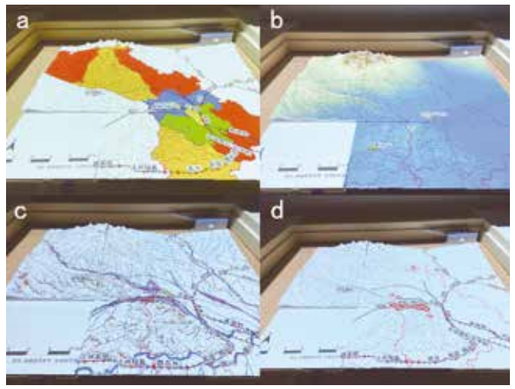


写真３　地形模型に投影したレイヤーの例
a：高崎市域の変遷（合併年ごとに色分けして段階的に表示することで、時系列で市域の拡大を表現）、b：標高メッシュ、c：河川＋土砂災害＋浸水想定区域＋路線図、d：だるま工房の分布図＋路線図

市の特産品である「だるま工房」の分布や高崎市での映画やドラマのロケ地などの分布を説明した（写真3-d）。さらに、オープンキャンパスの参加者自身がGISを操作しながら地形模型に投影するレイヤーを切り替える体験も行った。学生スタッフがGISでのレイヤーの表示・非表示の操作を説明することで、GISに触れたことがない高校生もGISやプロジェクションマッピングの操作を体験してもらった（写真4）。

写真４　高校生にGISの操作を説明するゼミ生

写真５　集合写真

今回示したように、ホワイトボード、一般的なプロジェクター、ノートPCがあれば地形模型を用いたプロジェクションマッピングが可能である。こうした機材のほとんどは大学や高校などの教育機関はもちろん、公民館といった地域の公共施設にも準備されているものであり、さまざまな場面で展示可能であることが示された。今後、高等学校における「地理総合」の必修化でこれまで地理にあまり関心がなかった生徒の地理履修率の上昇が見込まれるため、生徒の興味や関心を高める授業や教材、地図表現をどのように工夫するかは重要な検討課題である。今回のような地形模型を用いたプロジェクションマッピングによって地図やGIS、地域への関心がある程度高まることが示唆されており、こうした展示が地域の社会・自然環境を考えるきっかけになることも期待できる。

高崎の〈食〉の魅力を伝えたいっ（^^♪

経済学部
教授
加藤　健太

地域科学研究所からブックレットの執筆依頼を受けたとき、ぼくは、すぐに<食>をテーマにしようと決心した。

主な読者として、高崎を中心とする群馬県民を念頭においた場合、衣食住という生活に身近な題材の中で、おそらく<食>の支持率がもっとも高いと思われたからである。さらにいえば、当初は<食>の中でも、とくに飲み屋さんに光を当てて原稿を書くという野望を抱いていた。

ぼくは、高崎経済大学に赴任して17年目を迎えるけれど、その間、まあまあ飲み歩いた結果、「高崎にはけっこうおいしい飲み屋さんがあるな」と感じていたからである。

ベルギー料理「momo」

ブックレットでも名前を挙げたが、豊富な種類のベルギービールをおいしいベルギー料理と楽しめる「momo」、群馬のお酒と群馬産の食材を使ったおいしい和食を楽しめる「IZANAI」、コの字カウンター（とテーブル席とお座敷）で絶品の魚河岸揚げをはじめとするおでんとお酒を楽しめる「安兵衛」、それらに加えて、昭和の歌謡曲が流れる店内で、絶品のお豆腐や串料理、群馬名物の刺身こんにゃくなどを肴にのんびり呑める「縁」などなど、ぜひ訪れてほしい飲み屋さんはいくつもある。

おでんとお酒を楽しめる「安兵衛」

とはいえ、原稿を執筆するためには当然、資料（情報）が必要だから、ぼくが書きたいことを書けるわけではない。というわけで、現実をしっかりと見つめ直して、まずは高崎の<食>に関する情報が載っていそうな『商工たかさき』のバックナンバーを片っ端からめくって、<食>関連の記事を集めた。

このようなアプローチ法を採用したこともあって、やはりメディアが注目する「キングオブパスタ」や「高崎バル」といったイベントが研究対象として急浮上してきた。その具体的な内容は、ブックレットで詳しく論じたから、そちらを参照してほしい。

もう一つ、ブックレットの執筆過程で強く感じたことを記しておきたい。それは、この作品が、ぼくの<力>だけではこのレベルまでオモシロくならなかったということである。まず、本学の研究支援チームの高橋史郎チームリーダーは、本作の構想を語るぼくに対し、キングオブパスタ実行委員会の矢嶋伸也事務局長を紹介してくれた。次に、矢嶋さんが、3年くらい前までの約10年間、実行委員会の事務局長を務め、現在は事業化推進室長の井上幸己さんを紹介してくれた。井上さんが提供した情報と写真は、本稿の実証水準を飛躍的に高める役割を果した。今回利用できなかった情報を含め、感謝の言葉をどれほど並べても、その貢献に報いることはむずかしい。

「からさき食堂」の「白い恋人」

絶メシリストに関しては、ぼくが実際に「からさき食堂」に行って「白い恋人」を食べたことが、原稿に臨場感を与えたと考える。この名物料理は、2023年3月に卒業したゼミの14期生の幹事長が、2年次の<プレゼンバトル>のチーム名に採用するレベルに大好きなメニューであり、ぼくもスッゴく気になっていたお料理であった。実食してみて、そのおいしさを知ることができた。なので、撮影した写真をブックレットに使うことを快諾してくれた、2代目店主・大山瑞枝さんにあらためて感謝の意を表したい。

最後に、ぼくは2023年6月7日、「うま酒を 飲むが楽しきはしご酒／ほろ酔いの街 高崎 ドロンケン」というコピーを打ち出し、6月2日から11日まで開催された「高崎はしご酒」に<参加>した。具体的には、「シンキチ醸造所」でクラフトビールを、「Katsu」で日本酒を、そして前出の「縁」でハイボールとレモンサワーを飲みながら「はしご酒」した。めっちゃたのしかったーっ(^^♪

この「高崎はしご酒」が「高崎バル」の後を継ぐ酒飲みのためのイベントではないかという推測は、おそらくまちがっていないと思う。なお、2023年11月12日には、「キングオブパスタ」に参戦し、パスタとビールを堪能した！(^^)！

高崎市民と群馬県民だけでなく、広く県外からも「高崎はしご酒」や「キングオブパスタ」に多くのひとが参加し、少し滞在時間を延ばして飲み屋さんを訪れてくれることを強く願いながら、そろそろ筆を置くこととする。

キングオブパスタ

2023

地域・社会貢献白書

教育による社会貢献

Takasaki City University of Economics

群馬県みどり市との地域資源を活かしたフリーペーパーおよび食・農・観光マップ

地域政策学部
片岡美喜ゼミナール

活動の経緯

この取組が生まれたきっかけは、本ゼミの卒業生の存在である。みどり市役所に勤務する本ゼミの第1期生から、2021年に同市の観光振興計画策定の委員長として協力を求められた。このことから私自身がみどり市へ随時足を運ぶことになり、その後、同市観光課の方との交流のなかで、本ゼミ学生もみどり市で何らかの地域活動を行ってはどうかというご提案があった。

本活動に参加した片岡ゼミ15期生は、2年生の段階である2021年からみどり市を訪問し、3年生になった2022年からは更に具体的な実践活動を行うことになった。訪問を行うなかで、みどり市には文化財・文化施設として「岩宿遺跡」や「富弘美術館」、「ながめ余興場」、美しい自然環境として「高津峡」「鹿田山フットパス」「草木湖」などがある。地域の足であり、観光列車としての役割を担う「わたらせ渓谷鐵道」も大変に魅力的である。町村合併によって、市内は広域化し、各地域の多様な魅力が加わった一方で、学生らは若い世代へのPRを行ってゆく必要があると感じるようになった。

その後、群馬県庁農村整備課が主催するやま・さと応縁隊への応募を行い、ご支援を受けられる運びとなった。そのことにより、本ゼミでこれまで活動を行っていた片品村に加えて、群馬県みどり市にて実践を開始することとなった。

学生による取組内容

2021年6月からは、みどり市役所産業観光部観光課、農林課の皆さまのご協力を得て、市内資源調査から開始した。同市内には観光課が所管する小平の里、農林課が所管する浅原体験村など、滞在型の観光・交流施設を訪問し、両施設のご担当者の方から現状と課題をお伺いすることになった。自然環境を活かしたグリーンツーリズム施設であるが、周辺観光資源と「面」としての観光ルート化は十分ではない状況が確認された。

その後、学生らが自発的に同市を訪問するなかで、先述した小平の里や浅原体験村を含めた観光資源調査を進め、多くの地域の方々との良い出会いを経験していった。地域の酒造メーカーや製パン店、地産地消を行う飲食店、蔵を活かした陶磁器販売とカフェを行う店舗、草木湖を活かしたアクティビティ指導を行う団体の方らとの出会いを重ねた。これらの地域調査から、みどり市の観光振興に何が必要かを学生らが考え、具体的な実践の形を打ち出してゆくことになった。

ひとつのチームは、小平の里や浅原体験村などの市内グリーンツーリズム施設は独立したインフォメーションのみである状況や、これらの施設を起点に他の市内の観光拠点や多彩な地域資源を周遊してもっとみどり市を知って楽しんでほしいという思いから、フリーペーパー「みどりのミ」を発刊することになった。テーマは若者にも支持される「レトロ」をイメージした誌面作りを行った。

もう一つのチームは、市内の飲食店や酒蔵、パン店など、地域の農産物を活用した事業者らを取材したことで、地産地消に取り組む事業者らにPRする場やその人手がないこと、若い層にも地場産品の魅力を伝えられる手頃なリーフレットを作成したいということで「KODAWARI MIDORI 食・農観光マップ」を作成するに至った。

いずれの調査も、コンセプト、デザイン、誌面への掲載内容、写真などすべて学生らの手によるものである。多くの取材とリテイクを繰り返し、努力の末に完成にこぎつけ、2023年3月にみどり市長への報告を行った際には大変好評を得た。

今後、これらの成果はみどり市の観光振興・地域振興のツールとして活用し、学生らも利用者アンケートのモニタリングや、SNS媒体を通じて活動を継続してゆく予定である。また、みどり市が東京にて実施する広報活動においても作成したフリーペーパーや食・農・観光マップは活用されることとなっている。

メイドイン高崎の海外展開プロジェクト

地域政策学部
小牧幸代ゼミナール

ドイツ人留学生とゼミ生が市内企業とコラボ

文化人類学（世界の文化の比較研究）を専門領域とする小牧研究室では、2022年度の2年生のゼミ生12人とドイツ人留学生2人が、高崎市内の企業とコラボし、海外市場を強く意識した商品の開発に挑戦しました。具体的には、ターゲット国をドイツ人留学生の出身地、ターゲット層を留学生とその家族を含む「一般の人々」に設定し、①日本酒、②高崎だるま、③陶器を製造する市内企業の既存の商品を、ドイツ人のライフスタイルや嗜好に合わせた製品へと改良したり、新商品のアイデアを提供したりする企画です。

留学生とゼミ生は11月に入って3つのチームに分かれ、まず、各企業の歴史や商品ラインナップをインターネットで調査しました。次に、国内外の同業他社の動向について、インターネットで調べたり、図書館で文献調査したりしました。その上で、日本人学生は日本について、ドイツ人留学生はドイツについて、互いの文化に関する情報を交換しました。たとえば、「日本／ドイツには、どんなお酒があるのか。いつ、どこで、誰と、どんな飲み方をするのか」「日本／ドイツにはどんな置き物や縁起物があるか。日本／ドイツでは年中行事・人生儀礼で何を飾ったり贈ったりするか」「日本／ドイツの定番のお土産や贈り物は何か」といった具合です。

このプロセスを経て、各チームが独自の方向性を定め、連携企業の強みと可能性を検討し、大学生らしい斬新なアイデアをパワーポイントの資料にまとめました。そして、12月中旬に連携企業にご挨拶と商品開発プレゼンを兼ねた訪問を果たしたのです。このとき各企業から得られた貴重なアドバイスとコメントをもとに、各チームはパワーポイントの資料を修正し、年明けにブラッシュアップしたバージョンで再度プレゼンを試みようとしました。ところが、日本酒と高崎だるまの企業は、いずれも12月～2月が一年で最も忙しい時期であるため、2回目のアポが取りづらく、日程調整に苦労しました。とはいえ、最後の最後に、ご厚意でリモートでのプレゼンの機会を与えていただき、内容の最終確認をしていただくことができました。

高崎市産業創造館での事例発表と商品化

留学生とゼミ生は、2023年2月10日に高崎市産業創造館にて開催された「公立大学連携事例発表会：産学官連携・地域貢献活動による地域振興を目指して」においてプロジェクトの成果を発表しました。驚いたのは、聴衆から大きな反響があっただけでなく、講評者からも非常に高く評価されたことです。さらに嬉しいことに、高崎だるまに関するアイデアの一部は連携企業にも受け入れられ、商品化の可能性が開けました。また、陶器ギフトに関するアイデアは、連携企業によって早くも試作段階に入り、2023年度以降、改良と試作を重ねた上で商品化されることが決定しました。

本プロジェクトは、日本人学生と留学生の間の国際交流、そしてそこに高崎市の魅力ある企業の商品力と柔軟で寛容な企業精神が加わって、当初は予想もしなかった新商品開発にたどり着きました。「自分たち自身が欲しいもの」を自分たちで考案し、資料にまとめて具体的に提案し、実際に作ってもらうというプロセスは、日本人学生にとっても留学生にとっても、貴重な学びの機会となり忘れがたい体験の場となったと思います。

※本プロジェクトは高崎市商工観光部産業政策課産業創造館の「令和4年度産学官連携推進事業」の成果の一部です。

ひと・地域を育む実践とゼミ生の学び
―生涯学習・社会教育による地域貢献活動―

地域政策学部
櫻井常矢ゼミナール

地域づくりの実践の中には、教育・学習の営みが豊富にあります。地域をつくる（地域が変わる）ためには、そこに暮らす人びとの意識改革や主体的な参加の積み重ねが求められます。生涯学習・社会教育研究室（櫻井常矢ゼミナール）では、こうした地域をつくる学びに多様な角度からアプローチし、ひとづくりの視点から地域政策や地域づくりの実践を考える研究活動を進めています。次に紹介する2022年度の地域貢献活動は、すべて学生が主体となった取り組みです。

持続可能な地域をつくる集落NPOでの実践

高齢化と過疎に直面する農村集落の暮らしの維持とは、どのようなことを意味するのか。上越市安塚区細野集落（25世帯）と当ゼミとの連携の始まりは20年前になりますが、コロナ禍の中断を経て2022年から再開しています。細野集落は、日本で最も早く集落を丸ごとNPO法人化した過疎集落再生の先駆的地域です。この集落では、民宿六夜山荘の経営を軸に、年間を通じて様々な地域外との交流事業を展開しています。ゼミ生は、集落主催の春の祭典（5月）、冬のキャンドルロード（2月）など地域行事への参加協力、そして稲作など四季を通じた集落の皆さんとの交流を進めてきています。厳しさを増す高齢化と人口減少のなかで、集落の暮らしや活力を維持するために必要なことは何か。ゼミ生は、大学の講義等では得ることのできない実践的な学びを積み重ねてきています。

細野集落のキャンドルロード（2月）

六夜山荘での集合写真（8月）

地域主体の教育・学習をめぐる海外での実践

櫻井ゼミナールでは、特にカンボジアやベトナム、あるいはエジプトなど海外の地域学習活動への調査やサポート活動を進めています。コロナ禍によって3年近く交流が途絶えましたが、2022年度から再開しています。

写真は、カンボジア・シェムリアップにおいて、地域が主体となって運営する保育園の様子です。この地域では、子どもたちの補習学習環境を地域独自に整備するとともに、図書館、病院、集会施設等の地域の暮らしにかかわるインフラ整備を地域自らの力で進めています。保育園については、この地域全域に複数カ所整備され、全ての子どもたちが保育を受けられる環境を地域の力で整えています。そのほか農村地域における識字教育の現場なども訪問していますが、農作業を終えた夜、若者から高齢者までが世代を越えて熱心に学び合う姿から"ひとは生きるために学ぶ"という教育の原形態をゼミ生自身が実感することに結びついています。

シェムリアップ Tatrai Village 保育園にて

「地域に根ざした公民館」を育む連携事業

2019年4月に高崎市内に新設された久留馬公民館と当ゼミとの連携事業です。2022年度は次の3つの事業に取り組んでいます。久留馬の里・夏祭り（8月）では、「久留馬地域を知る」のコンセプトのもと、来場者から地域のおすすめスポットなどを聞き取り、地域の魅力を整理しました。また、この地域で初めての文化祭となる第1回久留馬ふれあいフェスティバル（11月）でも、公民館職員の皆さんとともに会場設営に協力しつつ、公民館利用団体（5団体）の発表の場づくりに取り組んでいます。そして3月に開催された「梅を愛でる会」では、親子で梅料理にチャレンジする料理教室の運営に携わっています。

こうして開館4年目を迎える久留馬公民館は着実に地域に浸透しつつあり、そこにゼミ生のかかわりを継続的に進めています。地域からの信頼を得ながら学びの拠点（公民館）を形成する一連のプロセスは、社会教育施設が単なるサービス提供の場ではなく、住民とともに歩む創造的な場であることをゼミ生は体得していくことになります。

久留馬の里・夏祭り

梅を愛でる会

「高大コラボゼミ」を通じた地域貢献
―高崎からのグローカル人材育成―

経済学部
教授
矢野　修一

日本企業のケーススタディを通じ、専門的知識・英語力・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力を高めるとともに、進路・キャリア意識の涵養を図ることを目指す「高大コラボゼミ」は、2010年度、高崎経済大学・矢野ゼミ3年生と高崎市立高崎経済大学附属高校3年1組との間で始まりました。2023年度で14年目を迎えています。高経附の特色ある教育プログラムのひとつとなり、今では、高経大・阿部圭司ゼミ3年生の指導を得ながら高経附2年1組の生徒が「日経ストックリーグ」に参加するコラボゼミも定着しています。

2022年3月、それまでの成果を踏まえて『高崎からのグローカル人材育成―「高大コラボゼミ」の12年』（高崎経済大学ブックレット⑦）をまとめました。また、高大コラボゼミを経験した高経附・高経大の卒業生に対してアンケートを実施し、その結果を地域科学研究所発行の『産業研究』第57巻第2号に掲載しました。いずれも高崎経済大学のホームページから閲覧・ダウンロード可能ですので、高大コラボゼミについて、詳しくはぜひそちらをご覧ください。

私の主宰するコラボゼミでは、日本経済新聞社主催「円ダービー学生対抗戦」に参加しながら国際政治経済への関心を高め、高校生は実用英語検定、大学生はTOEICをステップとしながら英語学習を進めます。

2022年度高大コラボゼミの様子

メインとなるのは、毎年、高校生・大学生混成の6グループで行う6つの日本企業に関するケーススタディです。2014年度から2018年度まで、高経附は文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されましたが、指定前から取り組んできた、この企業研究がSGH事業の重要なプログラムでした。

「ゼミ」という以上、教室での一方通行的座学と違い、高校生もグループ内で実際に発言し議論しなければなりませんし、レポート・プレゼンの形で研究成果を発信しなければなりません。大学生は「教えることを通じて学ぶ」ことになります。いかなる内容・事象であれ、本当に理解していなければ、高校生に教えることはできないからです。

高校生と大学生は、6社のHP、新聞・雑誌・テレビのニュースや解説、シンクタンクや研究機関の専門的論文・調査資料を材料に議論を積み重ね、企業の沿革、同業他社の動向、中期経営計画の意味、株主総会の様子、新興国の経済状況などについて、5カ月にわたり研究を深めていきます。研究成果は、高校生が主体となり、毎年9月、高経大の大教室において、数百名の聴衆の前で披露されます。

2022年度高大コラボゼミの様子

2022年度成果発表会

ここ3年は、新型コロナ感染拡大の影響で、高大コラボゼミのメインイベントである企業訪問はオンラインになってしまいました。それでも、高校・大学関係者、企業訪問をアレンジしてくださる経営支援NPOクラブ（大企業の退職者による社会貢献団体）の皆様が入念に準備していただいたおかげで、高校生・大学生とも「世界は誰かの仕事でできている」という現実に迫ることができたと思います。

高大コラボゼミは、高崎発の「高・大・産・老」の連携教育モデルであり、開始以来、各方面から注目され、新聞や雑誌でも取り上げられました。高大コラボゼミを経験した高校生・大学生は、今では国内外の各地域、各方面で活躍しています。高大コラボゼミを通じた「グローカル人材」の育成は、高崎経済大学による地域貢献のひとつと言えるでしょう。

2022年度成果発表会

ビジネスコンテストとフィールドワークで地域活性化を学ぶ

地域政策学部
山本匡毅ゼミナール

2022年度の活動と実践

当ゼミナールでは、「地域の産業振興と地域活性化」について、グループワークで学んでいます。ゼミでは文献研究のほかに、地域での活動と実践を重視しています。その活動と実践がビジネスコンテストとフィールドワークです。地域の産業や活性化を理解するためには、学生が地域やビジネスを肌で感じたり、地域と関わることが求められます。2022年度は、1期生（3年）が山形県長井市における長井ビジネスチャレンジコンテストへの出場、及び事前調査としての同市でのフィールドワーク、2期生（2年）が高崎信用金庫主催たかしんビジネスプランコンテスト2022への有志での出場、環境省補助事業による山形県真室川町のフィールドワークを実施しました。

ビジネスコンテストへの参加

1期生は、長井ビジネスチャレンジコンテストに3年生13人が4チームに分かれて応募しました。事前調査やエントリーシートの作成は、演習Ⅰのサブゼミ及び夏休みに進め、4ヶ月程度の時間を掛けました。エントリーシートの選考の結果、2チームがファイナルイベントへ進出しました。2023年2月18日に長井市で開催されたファイナルイベントでは、ゼミ生から「フィールドワークを総サポート！　長井で「地域」を学ぼう」、「#まっ地んぐ-農家サポートのマッチングアプリ-」のプレゼンテーションが行われ、最終的に前者がビジネスアイデア部門賞を受賞しました。

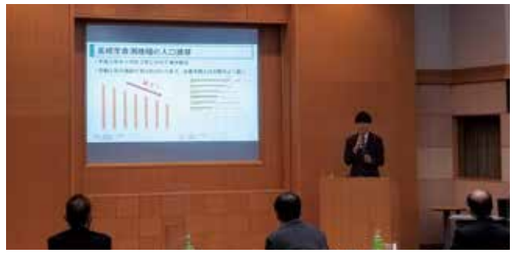
2期生は、たかしんビジネスプランコンテスト2022に2年生3人の有志で出場しました。今年度のテーマは「つくってこわす！新感覚くらぶち　ツリーハウス体験」とし、対象地域を高崎市倉渕地域に設定しました。地域資源である森林資源を使い、ツリーハウスを作り、壊すところまで体験するというビジネスです。同コンテストでは、2022年12月17日に開催された最終審査へ進み、結果として最優秀賞を受賞しました。山本ゼミとしては同コンテストの最優秀賞を2年連続で受賞できました。この提案は、2023年5月12日に烏川流域森林組合様と高崎市倉渕支所様へプレゼンさせていただきました。

フィールドワークの実践

1期生は、長井ビジネスチャレンジコンテストの事前調査として、長井市役所のご協力の下で、2022年8月31日～9月2日に山形県長井市でフィールドワークを行いました。このフィールドワークでは、事前に決定した4つのチームの各々のテーマごとに調査票を作成し、各希望に応じて調査先へ向かいました。コロナ禍であったことから、1期生にとって初めての本格的なフィールドワークになりました。この成果は、前述の長井ビジネスチャレンジコンテストに活かされました。

2期生は、環境省補助事業「令和4年度教育機関と連携した地域再エネ導入促進及び地域中核人材育成研修」に採択され、山形県真室川町における地域再エネの調査を行いました。同事業は全国から15大学が採択され、フィールドワークを通じて地域再エネを学修するものです。当ゼミでは2023年2月9日～11日に真室川町役場のご協力の下、木質バイオマス施設、企業、政策の調査を進めました。その成果は、2023年2月20日に真室川役場、山形銀行に向けてオンラインで報告するとともに、2023年3月17日に環境省全体交流会（オンライン）で最終報告を行いました。

ゼミにおけるビジネスコンテストやフィールドワークは、輪読だけでは得られない課題解決力やプレゼンテーション力を磨くことにつながり、学生の自信にもつながったようです。山本ゼミでは、これからも県内外の地域や機関と連携させていただき、地域での活動と実践を進めていきたいと思います。



2023
地域・社会貢献白書

課外活動による社会貢献

Takasaki City University of Economics

学生ボランティア活動支援室

学生ボランティア活動支援室

2018年5月、本学に学生ボランティア活動支援室が開設されました。支援室開設の目的は、地域社会から寄せられるボランティアの要請への対応と、ボランティア活動に関心と意欲を持つ学生に対する支援を通じて、地域社会貢献と学生の成長の間に好循環を生み出すことにあります。

開設以来、学生ボランティア活動支援室は、学外からのボランティア要請を受け付けて学生に対して情報を提供する一方、ボランティア活動を希望する学生に登録してもらい、ボランティア活動に関する研修を実施して、ボランティアの要請と学生とをマッチングすることを基本的な役割のひとつとしていますが、その後支援室の活動が軌道に乗るのに伴い、その活動のウィングを広げてきました。学内のボランティア団体との連携を強化するために、ボランティア活動に関わる学内の学生諸団体との情報交換会を実施して学生のボランティア活動の実績を蓄積し、また、学内ボランティア団体と合同で新入生向けに説明会を実施して、社会貢献活動の啓発を行っています。さらに、市内3大学（高崎商科大学・高崎健康福祉大学・新島学園短期大学）との情報交換会を実施して、各大学におけるボランティア活動に対する組織的な取組みと、地域社会からのボランティア要請に関する情報の共有を進めています。

2022年度の活動について特筆すべきは、コロナ禍による様々な制約により活動全般が停滞せざるを得なかった2020年度と2021年度と大きく異なり、ボランティア要請受諾件数が48件（2021年度は21件）、ボランティア派遣者総数が770人（2021年度は238人）と大きく増加したことです。また、以下に報告されているように、支援室に学生協働スタッフを設置することにより、職員と学生が一体となって、ボランティアの啓発活動を推進する体制が構築されつつあることも、2022年度の大きな成果のひとつといえます。

まだまだ手探りで進めているところですが、今後も、地域社会からのボランティア要請に応えながら、学内のボランティア団体との連携の強化と啓発活動を通じて、地域社会貢献に積極的に取り組むマインドの醸成に寄与したいと思います。

学生ボランティア活動支援室長　唐澤　達之

2022年度の主なボランティア活動先

・群馬県警大学生少年サポーター
・NPO法人等無料学習支援
・高崎まつりボランティア
・高崎市内小中学校放課後学習支援
・倉渕ヤマアジサイの会
・キングオブパスタ
・NPO・ボランティアフェスティバル
・T-GRAPゴミ拾い×GPSランアート
・WIN-WINプロジェクト農作業体験　　など

学生協働スタッフ

2022年10月より、学生ボランティア活動支援室では、学生にとってボランティアがより身近なものとなることを目的に学生協働スタッフが設置されました。学生協働スタッフは、本学の学生により構成され、多くの学生にボランティアについて関心を持ってもらい、安心して活動をしてもらうため、自身の経験及び同じ学生という立場からボランティア活動の支援を行っています。

学生協働スタッフは、学生主体で企画会議を行い、イベントに向けて活動を行っています。その際に、学生だけでなく先生方、事務局の方々など幅広い方々をお呼びして会議を行うことにより、より良いボランティア支援が学生に向けて行えるよう心がけています。

また、本学のボランティア活動事例を地域社会に発信することや他大学との交流など、学外のボランティアコミュニティにも参加しており、ボランティア情報や知識の取得を積極的に行っています。

2022年度の活動を通して感じたことは、ボランティア活動に関心を持っている学生は多いものの、ボランティア活動に関する情報へのアクセスのしにくさや、ボランティア活動に対する不安などの事情から、実際にボランティア活動に参加できていない学生が多いのではないか、ということでした。一方で、地域社会や他大学との交流を通じて、ボランティア活動の多様性やボランティアの周知活動、住民とのコミュニケーション方法など多くの知識を得ることができました。

そのため、今後の活動ではボランティアに興味のある学生に対して、実際にボランティア活動に従事してもらうための支援を行っていく必要性があると感じています。また、ボランティアに興味のある学生だけでなく、学内全体においてもボランティアの啓発活動を行い、より多くの学生にボランティアに関して興味を持ってもらうことが今後の課題であると感じています。

したがって、学内においてボランティア啓発週間を設定することやボランティアに関する相談会を開催するなど、本学の学生に対してボランティアについて興味関心を持ってもらい、ボランティア活動を始める後押しを行なうとともに、学外のボランティア団体、他大学から得られた情報やノウハウを学内のボランティアサークル及び団体と積極的に共有を行いたいと考えています。

ボランティアは、他者への貢献だけでなく、自身の経験や教養の獲得にもつながる貴重な機会です。そのため、学生協働スタッフでは、このような貴重な機会を少しでも多くの学生に経験してもらい、地域社会に貢献できるよう、今後も活動を続けていきたいと考えています。

学生協働スタッフの活動事例

〈第２回学生ボランティア活動支援室企画審査会〉

2022年11月30日に第2回学生ボランティア活動支援室企画審査会が開催され、2組の出場者がボランティア活動のアイディアを発表しました。今回、学生協働スタッフは審査会進行のお手伝いをさせていただきました。2組とも熱意を感じる素晴らしい発表で、会場では審査員の方々の質問が飛び交い、非常に白熱した審査になりました。審査後、2組には水口学長から表彰状が授与され、現在企画実現に向けて活動を行っています。

学生協働スタッフは、今後も学生が地域社会について考え、ボランティア活動を自ら考え、主体的に行うことのできる場づくりを行っていきたいと考えています。

〈NPOボランティアフェスティバル〉

本イベントは、高崎市内のボランティア団体が自身の団体の活動成果発表及び交流を目的として行われています。2023年2月25日に行われた本イベントでは、高崎市内にある4つの大学(高崎経済大学、高崎商科大学、高崎健康福祉大学、新島学園短期大学)により共同で参加しました。各大学が自身の学内における活動の展示並びにミニゲームを実施し、他団体との交流やパネル展示、一般参加者との交流など、互いのボランティア情報の共有ができる良い機会となりました。

今後は、本イベントでの情報や経験を活かし、学内でのボランティア啓発イベントや学内の団体との共同イベントを行いたいと考えています。

〈ボランティアサークル合同新入生説明会〉

2023年4月17日に本学にて、ボランティアサークル合同新入生説明会を実施しました。本イベントでは主に1、2年生を対象とし、ボランティア活動希望の学生に対し、ボランティア活動団体の紹介をするとともに、各団体において相談スペースを設け、参加者がボランティアを始めようと思う機会の提供を行いました。当日は10団体が参加し、多くの参加者が各団体の相談スペースにて熱心に相談している様子が見受けられました。

今後もこのようなボランティア活動を始める場づくりを行っていき、ボランティア活動を行う学生を少しでも増やしていきたいと考えています。

高崎まちなか教育活動センター あすなろが運営する「cafe あすなろ」

高崎まちなか
教育活動センター
あすなろ

名曲喫茶「あすなろ」の誕生

1957年「郷土を美しい詩と音楽で飾ろう」という理念のもとに誕生した純喫茶あすなろでは、群馬交響楽団の演奏会や、有名詩人による詩の朗読会などが開催され、市民の文化的活動の拠点として親しまれていました。しかし、高度経済成長の潮流と社会環境の変化などから、惜しまれつつも1982年に25年間の営業に幕を下ろすこととなります。

しかし時代が進むにつれて、かつてのあすなろの復活を望む高崎市民の声が集まるようになりました。高崎市は、街なかの活性化のためには若者の力が必要と考え、その運営を高崎経済大学の学生に託しました。そうして2013年にコミュニティカフェ「cafeあすなろ」が高崎市鞘町に再び明かりを灯し、2023年で10周年を迎えます。

cafeあすなろが地域の人々の憩いの場として、さらには音楽の街・高崎の文化活動の拠点となるように、私たちは日々活動しています。

現在の活動と目的

Management of the students

「cafe あすなろ」での活動の全てが、社会に出て役に立つ実践的な学びであると考えています。

イベント企画・出店	商品開発
広報活動	地域交流

経済に通じ、実践的な活動を経験することで、地域を見る目を持って国内外において活躍できる学生を育成する。

Management by the students

「cafe あすなろ」は、高崎市及び、高崎経済大学の支援のもと、学生が中心となり運営をしています。

高崎市・高崎経済大学
▼
高崎まちなか教育活動センター　あすなろ

経営班	商品開発・売上分析　等
企画班	イベント企画・出店　等
広報班	広報活動　等

Management for everyone

私たち学生は、高崎市そして地域の方々に勉強の場を提供していただいています。それに応えるために、積極的に地域の活性化に貢献したいと考えています。
「cafe あすなろ」から

地域イベントへの参加協力	市民団体への施設貸出
文化発信の拠点としての充実	学生の成果発表の場

▶高崎市の活性化のために

僕らの力は地球を変える

「熱血！高校生販売甲子園」
実行委員会

熱血！高校生販売甲子園

「熱血！高校生販売甲子園」は、群馬県内外の高校生が地域の食材や特色を生かした商品を開発して実際に販売活動を行うイベントです。私たち大学生は実行委員として「舞台は街なか、主役は高校生、それを支える大学生」のスローガンのもと、企画・運営を行っています。第15回大会では、3年ぶりに高崎の街なかで対面で開催することができ、10校10チーム合計79名の高校生が参加しました。

	参加高校	チーム名	結果
①	群馬県立万場高等学校	万場海賊団	準優勝
②	明和県央高等学校	hook up bistro 明和	
③	群馬県立館林商工高等学校	ぽんぽこ食堂	
④	高崎商科大学附属高等学校	ANGEL 戦隊、♡	
⑤	第一学院高等学校高崎キャンパス	ちゃみ～ず	
⑥	群馬県立尾瀬高等学校	のいじゃー	
⑦	ぐんま国際アカデミー	凸凹シナジ～ず	
⑧	佐野清澄高等学校	佐野戦隊！きよすみん	第3位
⑨	群馬県立勢多農林高等学校	レッツ・ラ・まぜまぜ！～Patisserie SETANO～	優勝
⑩	東京農業大学第二高等学校	踊れ！ダイコン娘	特別賞

主役は『高校生』

出場高校は、「売上・利益」に加え、審査員による「接客・演出・地域性」等の審査、一般投票の合計点によって総合的に順位決定されます。単に利益を追求するだけでは優勝は難しく、いかに独創的で魅力的な商品を販売するのかが腕の見せ所です。大学生のサポートを受けながら、高校生は商品を一から考案していきます。商品開発は、地域の特産物や文化や歴史などを改めて調べ直すことから始まります。そこで新たな気づきを得て、商品のアウトラインが決まったらレシピを考案し、原価をもとに価格設定を行います。そして放送やテント装飾に工夫を凝らします。大会当日は、顧客を意識し販売活動を行うことで、大会を通して貴重で有意義な経験を得ることができます。

大会テーマはごみ削減

近年のSDGsに対する社会的意識の高まりを受け、第15回大会テーマは「ごみ削減」としました。高校生は、ごみ削減を意識した商品づくりや包装や容器の工夫、地域の食材を積極的に使用する地産地消に取り組みました。うどんのチュロスを作る際に出た欠片を使った「うどんちっぷ」、抽出後のコーヒーの粉を再利用した消臭剤などの販売が行われ、また、ごみ削減の取り組みを集約した展示やごみ箱の工夫を行い、来場者にごみ削減の取り組みを体験してもらいました。

販売甲子園当日

第15回「熱血！高校生販売甲子園」は高崎の大手前通りにて、3年ぶりに対面での開催となりました。2年間、対面で開催出来なかったため、資料や先輩の話を聞いてイメージを膨らませながら準備を進めていきました。高校生は地元の特産品を用いた商品とテント装飾で販売甲子園を盛り上げ、多くの高校で商品を完売することができました。高校生の頑張りに感動を覚えた実行委員、来場者の方も多かったはずです。その他、高校生が商品のPRするステージ企画「PR甲子園」や開会式・閉会式など、2日間のイベントは大成功で幕を下ろすことができました。

第16回大会のテーマは「じもといいとこ再発見！」に決まりました。今後も地域に根付いた活動を行い、地域社会に貢献しながら、より良い大会が開催できるように努めていきます。

ゴミ拾い× GPS ランアート

T-GRAP

T-GRAPは「群馬県のゴミ問題に対する意識改革」と「ゴミよりも価値あるものとの出会い」を目的に、毎月第2第4日曜日に高崎駅周辺でゴミ拾いを行っています。ただゴミ拾いを行うのではなく、「GPSランアート」と掛け合わせ、楽しみながら活動できるようにしています。活動中では、地域の方に声をかけてもらうこともあり、自分たちの活動を見ていただいていることをとても感じています。また、大学の教職員の方々との大学コラボでのゴミ拾いも行っています。教職員の方々、大学コラボによって知り、参加してくださる学生の方々がいます。ゴミ拾いを通じて、多くの方々と関わる機会になっていると思います。大学コラボによってもゴミ問題をより多くの人に広めていきたいと思います。

GPS ランアート「イス」

GPS ランアート「サクランボ」

ゴミ拾い以外にも、他の団体との交流会、地域の小学校のボランティア参加も行っています。地域の方々や活動に共感してくださった大人の方々と出会い、交流することで、大学の枠を超えた人にゴミ問題を広めるとともに、私たちも新たに気づきを得ることができました。ゴミ拾い以外の環境やゴミ問題の考え方、広め方で新たに知ることもありました。今後もゴミ拾い以外にも活動を広げ、ゴミ問題を広めるとともに、多くの人との出会いや繋がりを広げていきたいと考えています。

ゴミ拾いや他の活動を行ってきて、ゴミ拾いは「地域をきれいにする」以外に「参加者で交流をしやすい場にする」効果があると感じました。私たちがゴミ拾いを行うときは、各自でゴミ袋を持つのではなく、燃えるゴミ、ペットボトル、ビン、カンの4つのゴミ袋をそれぞれ1人ずつに担当してもらい行います。そうすることで、拾ったゴミをゴミ袋に入れる際に、そのゴミにあった担当の人に声をかけ、最低限のコミュニケーションが生まれます。そこから、ゴミ拾いを行っているとき、時にはゴミ拾い後にその日が初対面の人同士であっても話しやすい場になることが活動を通じてわかりました。ゴミ拾いは他人が捨てたゴミを拾う活動でなぜやるのかネガティブに考えられることが多いと思います。しかし、ゴミ拾いはきれいにすることだけでなく、たくさんの楽しい面があります。捨てられたゴミを美化するわけではありませんが、思いもよらないゴミが落ちていることがあり、「宝探し」のような要素もあります。「ゴミ拾い」自体が楽しいものだと思います。そういった面も多くの人に広めながら、これからもゴミ拾いを行いながら、ゴミ問題を広めていきたいと思います。

進み続ける私たちの活動

WIN-WIN プロジェクト

私たちWIN-WINプロジェクトは、農業従事者の高齢化と若者の農業離れに着目して先輩方によって企画されたものです。私たちは農業のうち、作物の収穫などの単純労働の部分について、大学生を派遣し、農家の方の負担を減らすこと、大学生には農業体験を通して自然・農業について興味を持ってもらうことの二つを主に目的としています。農家の方と若者である大学生、双方にとってメリットのある活動を企画することが私たちWIN-WINプロジェクトの役割です。

本プロジェクトを企画した先輩方の代では、コロナ禍でそれほどボランティア活動を実施することができませんでした。しかし、その間に先輩が築き上げてくださった土台により今私たちは活動を円滑に進めることができています。ボランティア活動をするにあたり、参加者である高崎経済大学の学生と募集者である農家の方、双方のルールは活動をするにあたって非常に大切なものです。例えば、私たちの団体は農家の方からお礼金などはいただかないようにしています。学生はあくまで農業体験をさせてもらっている立場であるからです。このようなルールを含め、ボランティア活動前に学生へ注意事項などを説明する研修会というものがありますが、その流れや資料も先輩方が作ってくださいました。また活動を紹介するSNSやホームページなど、様々なものを先輩方から引き継いでいます。

現在の私たちの代では、学生の募集はできていないものの、JAさんや農家の方との連携を取ることができています。JAさんとはメールを介し、農家の方と私たちを繋げていただいています。また私たち運営役員は農家の方のもとで農業体験をさせていただき連携を取り合うことができています。3月にはアスパラガスの収穫、5月にはネギの定植を手伝わせていただきました。加えて、新入生の運営役員が入ってくれたのでより良く活動を進めていくことができそうです。次のボランティアでは、学生を実際にSNSなどで募集して農業体験へ参加してもらう予定です。週に1回会議を行い、着々と準備を進めています。

企画した先輩方がいなくなっても本プロジェクトを続けることができているのは、先輩方はもちろん、JAさん、農家の方が快く私たちを迎えてくださるからです。お忙しい中、私たちプロジェクトに賛同してくださっている周りの方に心から感謝しています。学生、農家の方にとって効果的な活動をするとともに、周りの方へ恩返しができるよう、このプロジェクトを良い形で次の代へ繋げていきたいと考えています。これからもご支援のほどよろしくお願いいたします。

地域とそこに住む方々のために

ボランティアサークル
ACT（アクト）

ボランティアサークルACT（アクト）は高崎経済大学の学生で構成されているボランティアサークルです。ACTとは、Area Cooperative Team（地域に協力的な組織）の略で、主に大学周辺地域の方々と交流・協力して、地域振興・地域活性化を目的とした活動を行なっております。地域の方々に向けたイベントを企画し、多くの方々の協力のもとサークルのメンバーと共に自分たちで企画したイベントを行なっております。加えて、とてもありがたいことにボランティアサークルACTにボランティアやイベントのお手伝いのご依頼をいただくこともあり、その方々のイベントのお手伝いをさせていただくこともございます。

2022年度の活動内容としては、北部公民館の職員の方に協力していただき地域の子どもたちに楽しんでもらうために「ACT祭」というお祭りやクリスマス会を開催する、北部小学校学童の子どもたちとドッジボールで遊ぶ、「高崎ユネスコ協会」の方々のイベントのお手伝い、地域の老人ホーム「ようざん」を訪問させていただき入居者の方々と交流する、地元のお祭りである「わくわくカーニバル」の運営補助、「手話べりin GUNMA」の方々に協力していただき手話の楽しさや面白さを発信するイベントを開催するなど様々な活動を行ないました。ここでは、ACT主催のイベントの中で代表的なイベントである「ACT祭」とボランティアサークルACT、手話べりin GUNMA、北部公民館共催事業である「手話で遊ぼう～手話べり会 in 北部公民館～」について詳しく紹介したいと思います。

クリスマス会の様子

ACT祭

ACT祭は、北部公民館の職員の方の協力のもと北部公民館で毎年7月に開催する北部小学校の児童など地域の子どもたちを対象としたお祭りです。少しでも地域の子どもたちに楽しんでもらえるように毎年サークルのメンバーでアイデアを出し合い催し物を考えております。自分たちでイベントの企画・準備・当日の運営を行なうので、とても良い経験になり得られるものも多く毎年楽しみにしているイベントです。2022年度は、的当てゲーム、輪投げ、ヨーヨー釣り、スーパーボールすくい、バルーンアート、パッチンがえる・ぶんぶんゴマの工作を行いました。とても嬉しいことに当日は100人以上の子どもたちが来てくれました。子どもたちがACT祭を楽しんでいる様子を見てとても嬉しくなり、イベントを実施して本当に良かったと思いました。活動を通して実際に自分がイベントの企画・準備・運営に携わるやり甲斐や楽しさを感じることができました。

パッチンがえる・ぶんぶんゴマの工作の様子

バルーンアートの様子

的当てゲームの様子

ヨーヨー釣り・スーパーボールすくいの様子

手話で遊ぼう
～手話べり会 in 北部公民館～

「手話で遊ぼう～手話べり会 in 北部公民館～」は、手話の魅力や楽しさの発信や若者が手話に触れる機会の提供を目的とし、ボランティアサークルACTと群馬県内で手話の魅力や楽しさを発信している「手話べり in GUNMA」の方々と北部公民館の職員の方々と共催で行なったイベントです。当日は、「一般社団法人 手話エンターテイメント発信団oioi」の方々が考案した手話を用いたラジオ体操である手話体操や「手話べり in GUNMA」の方々オリジナルのクイズや絵カードを用いた手話ゲームを行ないました。多くの子どもたちやその保護者の方々が来てくれ、イベントを通してみんなで手話に触れ、自分の名前や身近なものなどを手話で表現する楽しさを知ることができました。これからも「手話べり in GUNMA」の方々と協力し、手話の魅力や楽しさを発信していきたいと考えております。

「手話で遊ぼう～手話べり会
in 北部公民館～」の様子

今後に向けて

ボランティアサークルACTは多くの方々の支えによって活動することができております。私たちはACTに関わってくださる全ての方々への感謝の気持ちを忘れずに少しでもその方々のお力になれるようにこれからも活動をしていこうと思っております。そして、地域振興・地域活性化のために精一杯自分たちができることをしていきたいと考えております。

身近な社会問題の解決を目指して

NPO法人国際ボランティア
学生協会
IVUSA

私たちNPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）は、全国80以上の大学、約2500人の学生が所属している日本最大級の学生ボランティア団体です。「国際協力」「地域活性化」「環境保護」「災害救援」「子どもの教育支援」の5つの分野を中心に活動を行っています。IVUSAは学生というニュートラルな立場を活かし、様々な人・地域・団体を繋ぎながら国内外の課題解決に取り組んでおり、学生にとっての学びの場となっています。活動を通して様々な繋がりを作ることで「共に生きる社会」の実現を目指し、国連が定めたSDGsの達成に貢献していきます。IVUSAでは所属している大学周辺の地域に根ざした活動を行うため、学生主体のクラブという支部を全国に作っており、高崎経済大学は群馬高崎クラブに属しています。群馬高崎クラブは他にも群馬県立女子大学、群馬大学、群馬県立県民健康科学大学の学生が所属していて、様々なボランティア活動を行っています。そんな群馬高崎クラブが行っている活動を紹介します。

とみおか夏まつり

とみおか夏まつりは、富岡青年会議所が主催するお祭りで、毎年7月に富岡市で開催されています。昨年は2019年以降3年ぶりの開催となり、会場には多くの方が訪れました。IVUSAでは会場の設営やステージの進行といったお祭りの運営のお手伝いをさせていただいたり、お祭りの最後にはよさこいを披露したりしました。また、当日は輪投げや水ヨーヨー等といった縁日ブースだけでなく、IVUSAブースにてバルーンアートや新聞紙を用いたエコバッグ作りを行いました。お祭り全体を通し、沢山の方と交流しながら、3年ぶりとなるお祭りの盛り上げに貢献させていただくことができました。

高崎清掃活動

高崎清掃活動では、参加者自らが環境問題やごみ問題について事前に理解を深めた上で、清掃活動を行っています。昨年度は高崎経済大学の周辺と玉村町の2か所でごみ拾いを行い、どちらも多くのごみを回収する結果となりました。また、3月に行った清掃活動では、身近なごみ削減の取組みを参加者同士で共有するエコフェスを実施し、リデュース・リユース・リサイクルに向けてごみ問題に対する当事者意識を高めました。

南牧村活性化活動

南牧村での活動は、南牧村でカフェを経営されている方の力をお借りしながら、南牧村で行われる催しのお手伝いや、南牧村の子どもたちとの交流を行っています。南牧村は少子高齢化が深刻化している地域で、大学生のパワーを南牧村に届けることを目的として、昨年度は様々な角度からの企画の提案も行いました。さらに、毎週南牧村にて南牧村の子どもたちと遊ぶ活動も行っています。今後もそのようなボランティア活動を継続しつつ、IVUSAとして南牧村をさらに盛り上げていく取組みを企画・実施していきたいと考えています。

今後の展望

私たち群馬高崎クラブでは、今後はこれまで行ってきたボランティアは勿論、コロナ禍によって繋がりが薄くなってしまった団体や地域の方とも連携を取りながら、群馬県内の様々な社会問題解決に向けて活動を行っていきます。SDGsの達成に向けて残されている期間は2030年まであと7年しかありません。私たちだからこそできることを考え、社会によい影響を与えていけるように努力していきます。

就職活動支援における地域連携

【高崎商工会議所との連携事業

高崎市内大学連携 合同企業説明会

地元企業ならではの情報や社員の生の声を聞き、学生の就職活動に視野を広げることを目的に、高崎市内の優良企業を招いた説明会を開催しています。

2022年度は高崎市内の7大学が連携しオンラインで開催いたしました。

参加企業

・赤尾商事（株）・クシダ工業（株）・群馬トヨタ自動車（株）
・（株）群馬総合土地販売 ・（株）群生舎・ぐんまみらい信用組合
・高崎信用金庫 ・高崎ターミナルビル（株）・医療法人社団美心会
・藤田エンジニアリング（株）・冬木工業（株）

高崎市内優良企業見学バスツアー

1～3年生を対象に地元企業を見学するツアーを開催しています。高崎の魅力の1つは、元気のある優良企業がたくさんあることです。座学では得ることのできない体験をし、参加者からは「地元企業に対する関心が深まった」、「実際の現場を見ることで将来の進路選択に役立てたい」といった声があがっています。

【インターンシップ送り出し】

大学が窓口となり、官公庁のインターンシップへの送り出しを行っています。本学は公務員を志望する学生が多く、毎年多くの学生が自治体の実施するインターンシップに参加しています。

2022年度 官公庁へのインターンシップ実績					
霞が関女子学生インターンシップ			1名	富岡市（群馬県）	6名
経済産業省	1名	福島県	1名	熊谷市（埼玉県）	7名
前橋財務事務所	2名	ひたちなか市（茨城県）	4名	横浜市（神奈川県）	3名
函館市（北海道）	2名	足利市（栃木県）	3名	新潟県	1名
弘前市（青森県）	24名	佐野市（栃木県）	1名	富山市（富山県）	1名
岩手県	2名	群馬県	1名	石川県	1名
宮城県	2名	高崎市（群馬県）	2名	長野市（長野県）	1名
秋田県	1名	渋川市（群馬県）	2名	静岡県	2名
湯沢市（秋田県）	1名	伊勢崎市（群馬県）	1名	袋井市（静岡県）	1名
山形県	2名	太田市（群馬県）	4名		

【官公庁へのインターンシップ実績】

【地方就職希望者への支援】

U・Iターン就職や地方への就職を希望する学生に対して、「Uターン志望者向け就職セミナー」を実施しています。

また以下の自治体と就職支援に関する協定を結んでいます。

※（ ）内は締結年月

・長野県（2015年2月） ・栃木県（2015年12月）
・札幌市（2016年10月） ・茨城県（2017年7月）
・岩手県（2018年2月） ・福井県（2022年10月）

【就職支援協定締結自治体との主な連携】

（2022年度）

・栃木県庁業務説明会（2023年2月） ・岩手県庁業務説明会（2023年2月）
・福井県UIターンセミナー（2023年2月）

さらに、全国に30ある同窓会の各支部と連携し、それぞれの地区で同窓生による就職相談会を開催しています。

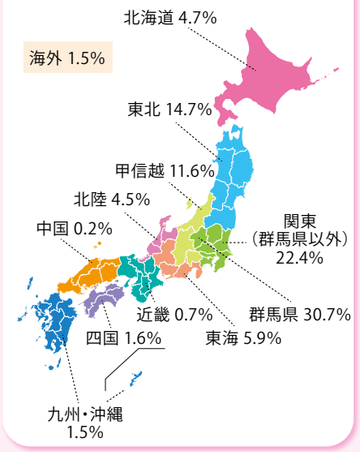
【同窓会支部における就職相談会開催実績】

（2022年度）

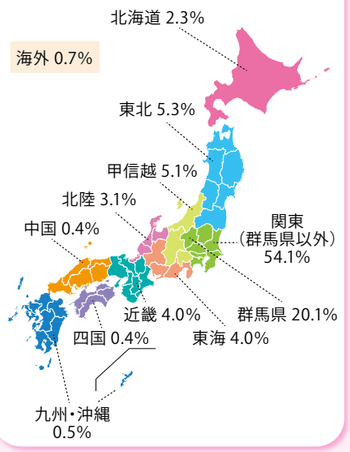
・静岡支部（2022年8月）
・札幌支部（2022年9月）
・長野支部（飯田支部合同）（2022年11月）

高崎経済大学では、これまで、約40,000人の卒業生を送り出しています。全国から高崎に学生が集まり、各地域の企業、自治体で活躍しています。

2022年度卒業生 出身地域別学生割合（単位：%）



2022年度卒業生 地域別就職割合（単位：%）



本学には、幅広い分野・フィールドでの研究を行う教員が在籍しています。QR コードを読み取り、大学ホームページの教員一覧を参照していただくと、「現在の研究課題」や「社会における活動・受賞歴等」など、詳しい情報を閲覧することができます。

経済学部
専任教員

地域政策学部
専任教員

地域連携・産官学連携活動

氏名	学部	職名	連携先	活動内容・成果など	活動時期・期間
梅島　修	経済	教授	経済産業省貿易経済協力局 貿易管理部特殊関税等調査室	不当廉売関税措置の発動の可否及び関税率を決定するための調査について助言し現地調査に参加した。	通年
			経済産業省 通商政策局通商機構部 国際経済紛争対策室	「令和 4 年度WTOパネル・上級委員会報告書研究会」(WTO 紛争解決パネル、上級委員会報告書、その国際通商にかかわる仲裁等)における議論及び判断を検討する研究会にて副主査を務めた。	2022年11月～ 2023年2月
			日本機械輸出組合	企業において初めて FTA 特恵関税を活用して輸出入を行う業務を担当する者を想定して FTA 特恵関税の仕組みと活用方法を解説した「初心者のための経済連携協定 (EPA) / 自由貿易協定 (FTA) 関税活用ガイド(2022 改訂版)」を執筆した。	2022年 8月～11月
黒崎　龍悟	経済	准教授	・アジア経済研究所(IDE-JETRO) ・早稲田大学平山郁夫記念 ボランティアセンター(WAVOC) ・持続可能な社会に向けた ユースプラットフォーム(JYPS)	ワークショップ「アフリカ塾 (国際協力×世代間対話)」 講演	2022年 7月30日
佐藤　敦子	経済	准教授	群馬県	景気動向指数アドバイザー委員	2017年5月～現在
			川崎市	文化芸術振興会議委員	2018年2月～現在
			川崎市	川崎市公共施設マネジメント推進委員会 ホールのあり方検討専門部会委員	2021年8月～ 2023年9月
水口　剛	経済	学長	群馬県	湯けむりフォーラム(草津開催)グリーンイノベーション分科会で登壇	2022年12月17日
			群馬県	群馬環境フェスティバル･脱炭素ライフスタイルフェアで登壇	2023年2月19日
			金融庁	サステナブルファイナンス有識者会議座長。 同有識者会議にて、2022 年 6 月、第 2 回報告書を公表。	2022年度
			環境省	グリーンファイナンスに関する検討会座長。 同検討会にて、2022 年度に『グリーンボンド及びサステナビリティリンクボンド・ガイドライン』を公表。	2022年度
			金融庁･GSG国内諮問委員会	インパクト投資に関する勉強会座長	2022年度
			社会変革推進財団(SIIF)	インパクト志向金融宣言のアドバイザー	2022年度
森　祐司	経済	教授	(公財)群馬県観光物産国際協会	資金運用委員会 学術専門委員	2022年10月～現在
井手　拓郎	地域政策	准教授	シルクカントリー群馬プロジェクト 実行委員会	令和4年度絹ラボ審査委員会	2022年6月～現在
			下仁田町観光協会	DMO事業推進検討会議　座長	2023年1月～現在
			南牧村	南牧村観光協会設立検討委員会　委員長	2023年1月～5月
佐藤　徹	地域政策	教授	千葉県	統合計画の政策評価に関する有識者懇談会員	2010年4月～現在
			群馬県	行財政改革評価･推進委員会委員長	2010年9月～現在
			戸田市	外部評価委員会委員長	2011年9月～現在
			桶川市	協働審議会会長	2011年9月～現在
			上尾市	地域創生総合戦略審議会会長	2015年7月～現在
			埼玉県	施策評価有識者会議委員	2022年5月～現在
			内閣府本府	政策評価有識者懇談会委員	2021年5月～現在
			日本都市センター	都市調査研究グランプリ(CR-1グランプリ)選考委員	2022年6月 ～2023年3月
髙橋　栄作	地域政策	教授	群馬陸上競技会	理事	2022年4月 ～2023年3月
			高崎市陸上競技会	理事	2022年4月 ～2023年3月
友岡　邦之	地域政策	教授	前橋市文化国際課	統括責任者としてのアーツカウンシル前橋の運営	2018年4月～現在
長野　博一	地域政策	准教授	福島市	バリアフリー基本構想策定に関わる、飯坂温泉街の「おもてなし」に関する勉強会	2022年度
			越谷市	大袋駅東口周辺地区まちづくり構想2022の作成 大袋駅東口周辺地区まちづくり協議会への支援	2022年度
			調布市	総合交通計画の策定 調布市公共交通活性化協議会への支援	2021年度 ～2022年度
増田　正	地域政策	教授	総務省･明るい選挙推進協会	主権者教育アドバイザー(講演)	2022年11月29日 2023年2月21日
			群馬県議会	「議員に密着ゼミナール～もっと知りたい政治のハナシ」 (現代政治論特別講義)司会	2022年12月22日
			群馬県議会	ぐんまシチズンシップアカデミー(引率)	2023年2月27日
山本　匡毅	地域政策	教授	公益財団法人中部圏 社会経済研究所	「中部圏の国際地域間比較研究」委員	2022年8月 ～2023年4月
			一般財団法人機械振興協会	経済研究所の外部委員として、「産業集積再活性化委員会」では、地域再生可能エネルギーの議論と報告書作成、「日本の機械産業・国際競争力研究会」では、同所が刊行している『日本の機械産業』の助言を行っている。	2022年6月 ～2023年3月

学生と取り組んだ地域連携・産官学連携活動

氏名	学部	職名	連携先	活動内容・成果など	活動時期・期間
井手　拓郎	地域政策	准教授	東日本旅客鉄道株式会社 高崎支社･前橋駅	前橋駅「駅からハイキング」企画･実施	2022年6月 ～2023年3月
片岡　美喜	地域政策	教授	みどり市役所観光課	群馬県庁農村整備課やまさと応縁隊事業への参画 (みどり市における地域観光振興のための食･農観光マップとみどり市フリーペーパー「みどりのミ」制作)	2022年6月 ～2023年2月
			道の駅尾瀬かたしな	群馬県庁農村整備課やまさと応縁隊 (花豆を活用したコロッケの開発および花豆レシピ集の制作)	2022年6月 ～2023年3月
小牧　幸代	地域政策	教授	今井だるま店NAYA	ゼミ生5名が、今井だるま店NAYAさんの既存の商品をドイツで売るためのアイデアを出した。	2022年12月 ～2023年2月
			三美堂	ドイツからの留学生1名とゼミ生5名が、三美堂さんとコラボし、ドイツで売るための新商品を開発した。	2022年12月 ～2023年2月
佐藤　徹	地域政策	教授	埼玉県	まちづくり指標に関する調査研究	2022年12月23日
髙橋　栄作	地域政策	教授	群馬陸上競技協会･ 高崎市陸上競技協会	第15回　高崎経済大学競技会	2022年7月
				第 5 回 高崎経済大学長距離記録会	2022年12月
友岡　邦之	地域政策	教授	群馬県文化振興課	新文化振興指針策定に向けた、県とゼミ生との意見交換会実施	2022年5月、11月
長野　博一	地域政策	准教授	福島市	バリアフリー基本構想策定のための街歩き点検	2022年度
西沢　淳男	地域政策	教授	埼玉県川口市教育委員会	歴史を生かしたまちづくりのため、埼玉県旧跡である赤山陣屋址を散策するためのデジタルMAPをゼミ生と開発した。開発したデジタルMAPは、江戸時代の市文化財赤山陣屋絵図面と現代の地図・衛星写真の切替が出来、スマホを見ながら絵図面上を歩け、文化財の写真・解説、見どころも確認したり、リンクで詳細を確認することも出来るものである。	2022年8月 ～2023年3月
増田　正	地域政策	教授	群馬県選挙管理委員会	選挙啓発(TCUE投票ファクトリー)	参院選等
八木橋　慶一	地域政策	教授	榛名神社社家町活性化委員会	幽玄の杜音楽会および榛名新そば祭への協力、榛名神社での学生ボランティアによるガイド	2017年度～現在 (おもに春と秋)
山本　匡毅	地域政策	教授	真室川町役場	環境省「令和4年度教育機関と連携した地域再エネ導入促進及び地域中核人材育成研修」に採択 (全国で 15 大学) され、山形県真室川町で 2023 年 2 月に地域再エネのフィールドワークを行い、2 月下旬に真室川町役場へ調査報告 (ZOOM) を行った。この活動は、地元紙にも取り上げられた。	2022年12月 ～2023年3月
			高崎信用金庫	2年生有志3人が高崎信用金庫主催の「たかしんビジネスプランコンテスト2022」に応募し、最優秀賞を受賞した。本提案に際しては、事前に対象地域である高崎市倉渕地域、及び烏川流域森林組合のフィールドワーク、ヒアリング調査も行った。この成果は、2023年3月9日に開催された高崎モーニングピッチでも報告を行った。	2022年8月 ～2023年3月
			長井市役所	山形県長井市と連携し、夏休みのフィールドワークの実施、及びそれを踏まえた長井ビジネスチャレンジコンテストへの応募を行った。応募した4チームのうち、2チームが2月に開催されたファイナルイベントへ進出し、山形県長井市で最終プレゼンを行った。結果として、1チームがビジネスアイデア部門賞を受賞した。	2022年7月 ～2023年2月
米本　清	地域政策	教授	榛東村教育委員会･「ほっこりん」	地域支援･子育て支援イベント「ママフェス」･「パパフェス」の主たる実行者の1つとなっている。	2022年 9月、12月
			地域コミュニティをつなぐ会･ 高崎市	地域婚活イベントの実行支援	2023年3月

高崎のコミュニティ放送局であるラジオ高崎と連携し、大学の地域貢献の一環として「ラジオゼミナール」を放送しています。

これは、本学の教員が、専門分野から地域社会の課題について紹介し、研究成果やゼミナール活動報告を交えた情報発信を行っています。

QR コードを読み込みいただくと、過去に放送された音源を視聴することができます▶

ラジオ高崎　FM76.2MHz
毎週金曜日　9:30 ～ 9:44
再放送：①土　曜　日 11：15 ～ 11：29
②翌週月曜日 19：15 ～ 19：29
③翌週水曜日 10：30 ～ 10：44

【2022年度ラジオゼミナール】

※職名は放送当時

回	放送日(金曜)	担当教員	学部	職名	専門分野
1	4月29日	唐澤　達之	経済	副学長	西洋経済史、イギリス社会経済史、イギリス都市史
2	5月20日	寺田　光成	地域政策	特命助教	住民参加のまちづくり、こども環境
3	5月27日				
4	6月3日	伊藤　宣広	経済	教授	経済学史、現代経済学、経済学方法論
5	6月10日				
6	6月17日	蔡　珂	地域政策	特命助教	歴史学、近代教育史、日中比較史
7	6月24日				
8	7月1日	齋川　貴嗣	経済	准教授	国際文化論、グローバル・ヒストリー、国際機構史
9	7月8日				
10	7月29日	向井　悠一朗	経済	准教授	生産管理・技術経営
11	8月5日				
12	8月12日	小熊　仁	地域政策	准教授	交通政策論、観光交通論、公益企業論
13	8月19日				
14	8月26日	笠見　弥生	経済	講師	中国文学
15	9月2日				
16	9月9日	鈴木　陽子	地域政策	教授	憲法学
17	9月16日				
18	9月23日	原　史子	地域政策	教授	社会福祉学　児童・家庭福祉論
19	9月30日				
20	10月21日	関根　雅則	経済	教授	イノベーション論、経営戦略論
21	10月28日				
22	11月4日	坪井　明彦	地域政策	教授	マーケティング論、地域マーケティング
23	11月11日				
24	11月18日	土谷　岳史	経済	准教授	EU研究
25	11月25日				
26	12月2日	永田　瞬	経済	教授	経営労務論、社会政策論
27	12月9日				
28	12月16日	福間　聡	地域政策	教授	倫理学、社会哲学、応用哲学、死生学
29	12月23日				
30	12月30日	中野　正裕	経済	准教授	貨幣・金融経済論
31	1月6日				
32	1月13日	名和　賢美	経済	教授	デモクラシー論
33	1月20日				
34	1月27日	村山　元展	地域政策	教授	農村活性化論、地域農業論
35	2月3日				
36	3月10日	原田　玄機	地域政策	特命助教	社会政策、知的障害、歴史社会学
37	3月17日				
38	3月24日	唐澤　達之	経済	副学長	西洋経済史、イギリス社会経済史、イギリス都市史

本学では、知識のライフサイクル（創出、応用、保存、普及）の場である図書館において、快適な利用環境の向上を図るとともに、情報資源の拡充と設備の改善を進めており、その対象は、本学学生にとどまらず、ひろく一般市民にも開かれています。

～全国郷土資料について～

2001年度より一般の資料とは別に「県史」・「市町村史」、地方公共団体をはじめとする全国各地の団体の発行する資料などを中心に、地域性のある資料を「全国郷土資料」として収集し利用に供してきました。図書館4階に電動書架を設置し、都道府県ごとにまとまったかたちで図書資料を閲覧できるように配架しています。資料には市販されていないものも多く、特色あるコレクションとして誇れる資料です。

【開館時間】

開館日につきましては、変更する場合がありますので本学図書館ホームページにてご確認ください。

月曜日～土曜日　9：00～21：30
日曜日、祝祭日　9：00～17：00
春・夏・冬季休業中　9：00～17：00

	2020年度	2021年度	2022年度
学外利用者	376 人	651 人	1,066 人
学外利用者貸出冊数	1,259 冊	1,018 冊	878 冊

公立大学法人　高崎経済大学
Takasaki City University of Economics

地域・社会貢献白書 2023

2024年 1月発行

公立大学法人　高崎経済大学
〒 370-0801 群馬県高崎市上並榎町 1300番地
Tel 027-343-5417（代）

TCUE

Takasaki City University of Economics